

【翻 訳】

自然科学のようになれない社会学

—— アメリカ社会学の制度分析 —— (前半部分)

ステフェン・ターナー, ジョナサン・ターナー 共著
久 慈 利 武 訳

第1章 改革のアカデミー化：第一次世界大戦前のアメリカ社会学

【梗概】 初期の時代には、社会学者が利用できる物質的、象徴的、組織的資源は限られており、しばしば矛盾していた。社会学にとって物質的資源基盤は当初は改革運動から到来し、初期の社会学者が経験的リサーチを行うことができ、彼らの著述の聴衆を見つけ出すことができたのは、この基盤に基づいていた。社会学が「社会悪」の解決に役立つという感覚は素人社会に正当化のシンボルを提供したが、それはしばしばアカデミック社会学を他の分野の良化的残り物 *ameliorative leftovers* を取り出す残余科学にした。その上社会学をシンボリックに、実証主義、有機体論、進化主義、介入主義の周りを回転する理論的科学で統一しようとする試みは容易ならざる事態であることが判明した。科学の旗印の下での統一の試みは初期の社会学者がアカデミアの内外によって立っている改革主義の物質的基盤とじっくりしなかった。リサーチのための私的ファンド、学生の関心と登録、市のサーベイへの公的支援はいずれも社会問題と社会的分析の密接なつながりを維持することに依存した。理論は上記の問題から離れているように思われ、サーベイは次第に道徳的インパクトと民衆を教化する能力を失っていった。

アメリカ社会学がともにその組織資源を動員しようとしたのは象徴的資源と物質的資源であった。1905年のアメリカ社会学会の形成は容易でない妥協を現した。専門的学問を進める名の下で知的差異は抑えられた。実証主義、有機体論、進化主義の諸理論とサーベイ、表での表現というリサーチ方法には、何らかの統一が見いだされたのに対して、上記の潮流（実証主義、有機体論、進化主義）は社会学の運命を支配する大きな能力を持つ学会組織を生み出すのに十分ではなかった。というのは社会学の物質的基盤が変化するにつれて、脆い理論的コンセンサスと方法的コンセンサスは変化しなかったからである。実際、20世紀に入り十年がすぎると、創設者によって見過ごされていた分野の多様性が次第に顕在化してきた。

序論

1880年に *The Popular Science Monthly* の編集者は次のように主張した。

聡明な人物で、社会秩序が自然法則に基づき、原因結果を例示することを否定する者は一人もいないだろう。社会現象は、他の自然現象同様、分析され、分類され、一般原理に還元される。… 上記の社会法則が独立した科学群として編み出されるであろうことはもはや疑いの余地がないであろう (Editor 1880)。

上記の大胆なコメントは、ウィリアム・グラハム・サムナーとイェール大の総長の間の社会学の教えに関する論争に寄せた編集者のものである。イェール大の多数は、ハーバート・スペンサーの方法テキスト『社会学研究 (1873)』の使用と、伝統的に宗教と道徳哲学によって支配されてきた分野に「科学的」方法を導入することに反対したと思われる。1880年には「科学」という正当化の傘が挑戦を受けずに済まなくなった、そして我々が以下に見ていくように、100年にわたって、社会学の科学的装いがずっと論争の対象となる。*The Popular Science Monthly* の編集者にとって、そして初期の社会学者の多くにとって可能と思われていたものが、実は次第に問題を孕むものとなったのであった。

1. 改革運動としての社会学と宗教と科学

The Popular Science Monthly の編集者が自信に満ちた声明を行った当時でさえ、社会学が何か、何になりうるかに関してまだかなりの不確実性 (不定性) があった。というのは、1880年まで、「社会学」というタームは合衆国では数多くの含意を持っていた。オーギスト・コント、ハーバート・スペンサーの科学主義とのつながりのほかに、「社会学」というラベルは「依存階級」を援助する慈善的改革的努力、社会改革の必要を民衆に教化すること、教会を社会領域でもっと有効にする試み、協同組合運動の知的権威を擁護する議論、労働者階級に関する統計を収集するためのプログラムのような活動を包摂していた。上記のつながりの各々は、改革主義者の活動、州政府のリサーチから大学での授業、文字書きにわたる何らかの形態の作業に体现されている。上記の活動のすべては資源基盤を要求した。例えば、改革組織は会費と彼らの出版物の購読料をとった。州政府の統計書は税金によって賄われた。教会活動は会員の寄付によって賄われた。関与するものの多くにとって、上記の活動は副業であり、司祭の仕事、ジャーナリズムが彼らの主要な収入源であった。第一世代のアカデミッ

ク社会学者の起源は、専門の社会学者と他の活動の線が不明瞭な、多様なものであった。

南北戦争（1860-65）以前には「社会関係の哲学」のようなタイトルの講義が行われていた（Morgan 1982：27）。この戦争終結の20年間は、その内容と性格は定例化されていないものの、もう少し多くの講義が行われた。しかしながらひとつの共通テーマは社会改革の問題であった。当時の社会改革運動は、アカデミックな講義が志向していた主題とイデオロギー問題を提供していた。運動と改革主義の文献はアカデミックな社会学をはるかに追い越していた。それゆえ ASS の最初の10人ほどの会長の大半が何らかの種類の改革運動に背景を持つ人物であったことは驚くことではない。実際、アメリカ社会学の4人の「創設者」—— レスター・ウォード、グラハム・サムナー、フランクリン・ギデングス、アルビオン・スモール——で元々アカデミック・キャリアが用意されていた者は一人もいなかった。サムナーとスモールは神学の訓練を受けていた。ギデングスはジャーナリストであった。ウォードは政府の化石植物学者であった。

上記の創設者の各々は南北戦争のあとに生まれた相互に関連した改革運動の集合によって形成された知的世界の中で独自の見解を開発した¹。彼らはある意味で南北戦争以前の奴隷廃止論者の道徳的衝動の継承であった。上記の運動は執筆、編集、講義、実際の政治や慈善活動に参加し、たまに経験的リサーチを実施する機会を与えた。上記の運動の母体となった組織は今日ではほとんど姿を消している。というのは彼らの活動の多くは州政府の一翼を担っていたからである。

上記の組織の大半は売春、離婚、飲酒、若者にとっての不適切な催し等、の活動実践への嫌悪によって動機づけられた。南北戦争直後で目新しかったのは、これらの悪魔が啓発、立法、規制という撲滅キャンペーンを通じて克服されうるだろうという感覚であった。都市化工業化と連動して新たに目についた問題、特に戦争終結後の復員から生じた都市部での失業問題が改革主義者の気質に新しい領域を提供した。しかしながら、改革主義者が入り込んだ領域の大半では、「主義」の知的内容は大きくは壮大なものではなかった。悪魔とその解決は明白であると思われ、それらに敵対するのがキリスト教者の義務であったからである²。上記の実用的なねらいは、当時社会科学と呼ばれたものを読んだり書いたりすることを普及させ、改革者が社会科学の必要について語る時、彼らは人々を教育し意見を変えさせる必要を意味した。「社会科学」の中身は問題にされなかった。それは、矯正、慈善、労働問題を思索する「正しい思索をする人」によって到達される結論であった。

驚くなかれ、上記の主題に関する意見の雰囲気はある程度の不一致に導いたが、その大半は実用的な共通の任務に従事する人々の間の不一致であった。しかし緊張の源泉もまた存在した。特に宗教との結びつきが弱い諸個人がいて、彼らにとっては諸問題は善と悪の対立と

安易にみなすことはできなかった。結果として労働、移住、金遣い monetary policy は、悪魔の抑圧のようなトピックよりはもっと一丸となった知的努力を生み出した。ここでは、改革思想家は（南北戦争以前の時代（1830-1860）に奴隷廃止論者にとっては十分であった）聖書とプロテスタントの良心という曖昧な要請を超えて指針の欲求に応えることができた。「科学」としての社会学観は新しい学問的緊張を作り出した。というのは、19 世紀のアメリカでは、大半の科学は神の冒瀆であると見なされていたからである。

宗教と教育と科学の間の緊張は、南北戦争後の時期における社会学と社会科学書の最初のトピックであった。実際離婚のような改革問題に関する活発な高等ジャーナリズム a lively higher journalism はこの時期に登場した。このジャーナリズムの一部は特に「社会的」と認定され、「社会学者」となった者の一部は、*North American Review* のような総合的知性雑誌を読むことを通じて初めてその主題に関心を持った。

この時期の初期社会学者の活動は他者、特に改革者の目的に奉仕した。しかしながら、社会学のアカデミー化は、上記のクライアント、パトロンへの社会学の依存を変えることはなかった。改革者の目標にとっては、初期の社会学者が自活し、学生をリクルートし、公衆の聴き手を指揮する能力が肝心であった。上記のパトロネジ関係は時間とともに変化し、つながりは直接的でなくなったが、改革の奉仕へのアメリカ社会学の依存は消滅はしなかった。その一部がアカデミックな社会学者になった初期社会学者のリサーチ活動は、この依存を最も直接に示した。なぜなら彼らの仕事は広汎な研究資金給付を必要とし、同時に政治的に可視的で論争的であったからである。

2. アメリカ社会学における経験的調査の始まり

系統的ソーシャル・サーベイのアメリカ的系譜は南北戦争終結後 10 年間の経済的混乱の結果として登場した。「労働」の問題は民衆意識の重要部分となった。特に東部の州では、州政治の一成成分となった。例えば、1869 年のマサチューセッツ州労働統計局の創設は、南北戦争の復員兵の復帰がすでに雇用されている者のジョブを取り上げて失業させるかどうかの確定と失業者数の把握の要求に応える努力に関わっていた。

「労働統計」運動の当初の資源基盤は明らかに政治的であった。それは不十分ながら労働者階級の利害への譲歩であった。結果の「客観性」は問題なかった。なぜなら法廷での供述のように、その信憑性はその源泉と証拠のなかの事実が承認できることにあったから。だがこの新しいリサーチ技術にも拘わらず、統計局初代局長の H.K. Oliver は元々自分の任務を職権のやり方で証明を引き出すことと解していた。「証人」に支払われる義務的料金を免れ

る手段に気づいた後で、彼は自発的郵送質問のアイデアを思いついた。これとともにサーベイの伝統は始まった。当時の手に負えない労働運動の様々なサポーターを満足させるという政治的問題はこの資源基盤を不安定なものにし、その結果オリバーより有名な彼の後継者、Carroll Wright の下でマサチューセッツ局は公共問題に関する事実を収集し、それらに関する「バランスのとれた」報告書を生み出すリサーチ組織になろうと努めた³。

この戦略は政治目的に奉仕することにかかっていたし、「バランスのとれた」報告書はそれらに先行したアドボカシーリサーチ以上に客観的ではないであろう⁴。事実この当時は適切なエキスパートの共同体は何ら存在しないし、この種の報告書を評価するための承認された基準も一切存在しなかった。大学の少数の統計学者はこの政府の仕事にしばしば非常に批判的であり、彼らは情報と雇用を政府の統計家に依存しなかった。彼らは心からの個人的関係を維持し、仲違いを避けようと努めた。

3. アメリカ社会学における理論の始まり

奴隷廃止論者の直接の継嗣であった改革派第一世代は、意識の面ではっきりプロテスタントであった。彼らは地上に神の王国をもたらず人間行為の有効性を信じ、こんな風に立っている人々と状態の可変性を信じ、説得の力を信じた。これらは南北戦争の北部の勝利によって確証されたように思われた奴隷廃止論者の公準であった。労働問題と他の領域にそれらが持続したことは、多くの実際の困難とかなりの曖昧さと戦ったことが判明した。改革のアジェンダは 1870 年代初めまでは初期の改革派によって設定されたが、第一次世界大戦まで基本的には変わらなかった議題であった。ASS を結成した社会学者達は、改革問題が予想していたよりも厄介であることが判った 1870 年代半ばから始まった時代の所産であった。初期のアメリカ社会学の理論的遺産と第二次世界大戦までのアメリカ社会学独自の問題とテーマの一部はこの時期に設定された。結果として、アメリカ社会学が解決しようとした問題は、社会学の発展のあいだに知識人を生み出した他国のそれとは全く異なっていた。

アメリカ系譜の理論が初めて発達するにつれて、社会学の理論的使命に表面上のコンセンサスが見られた。初期のアメリカ社会学者たち、特にウォード、スモール、ギデンクスは少なくとも彼らの経歴の初期においては名目上コント主義者であった。社会学が依存した改革派の資源に当てはまるように、彼らはいずれも、人間組織の法則の発見は社会の前進的改良のために使用されうものとして信じていた⁵。コントに当てはまったように、この立場はその改革主義の支持者の目から社会学を正当化する手段と見なされたが、はるかに多くのものを含んでいた。社会学者は実際には社会学は自然科学を模倣できると信じていた。その結果、

社会学を単なる改良以上のものとして提示するかなりの努力が払われた。それは一般理論を生み出すことができる科学であった。ロスコー・ヒンクルが述べているように。

社会学にアカデミックな尊敬を与え、その領域が社会問題の単なるプラクティカルな改善に成り下がるのを阻止したと信じられたのは実は一般理論であった。一般理論は、…様々の、個別の、特異な、独特の形態と無関係に、人間結合、人間社会、社会現象一般の起源、構造、変化の第一原理、原因、法則を発見しようとした。…すべての専門化した社会学、社会学者は一般社会学、一般理論から始まって、それに寄与し、いずれはそれに戻る（Hinkle 1980: 267）。

それでは、そのような一般理論の性質とは何であったか。一般的には、初期のアメリカの理論家の作品は、コントの実証主義とスペンサーの有機体論とアメリカ独特の個人主義をブレンドしたものであった。コントの社会学の考えはシンプルであった。社会学は科学であり得る、人間組織の普遍的で恒常的属性を説明する基本法則を発見することができる（Comte 1830-1942: 5-6）。コントにとっては、「実証哲学の第一の特徴は、すべての現象を恒常的な自然法則に従うものと見なす点であった（Comte 1830-1842: 5）」。大陸のヨーロッパ社会学者がこれに懐疑的となっていく一方で、アメリカ社会学者は彼らの声明では少なくとも表面では、これを支持した。彼らは社会学が尊敬できる科学となることを欲し、彼らのテキストにコントの見解を論じるのにかなりのスペースを割いた。しかしコントは有機体と社会のかなり不正確なアナロジーを除いて人間組織の理論を持たなかったから、コント主義者であることは非常にシビアな問題に直面した。初期のアメリカ社会学者はかくして、スペンサーやドイツのフルベルト・シェッフレに引き寄せられた。

初期アメリカ社会学に登場したのは、抽象的一般理論を展開しようとする科学（1）と、進化主義、有機体論、潜在的機能主義との容易ならざる同盟の中に仲裁された個人主義／精神主義の組み合わせ（2）へのプログラムのコミットメントであった。ウォードの初期の作品（1883）はそのトーンであった。コントとスペンサーのレビューから始まって、次いで集積のプロセスないし法則の分析で、スペンサーのより一般的な宇宙理論に転じる。最初の集積は、事物、聖なる身体、化学的關係を作り出す。2番目の集積は、生命、有機体（生物）、人間、精神を作り出す。第三の集積は社会関係と社会を作り出す。かくして700頁にわたる第一巻の末尾で、宇宙の他のすべての諸力とその諸力を研究する個別科学との関係で社会学の領域を設定する。コントとスペンサー風序説の後で、第2巻は、社会学に転じる。ウォードによる他の科学と社会学の特徴付けの基底にあるのは、シナジーの概念であった。そこで

はエネルギーを宇宙の創造物に絶えず充填，再充填することが宇宙の駆動力である。これは明らかにスペンサーから継承したアイデアである。そしてシナジエ的合成の性質に左右されながら，様々の科学が主題を引き出す。ウォードにとっては，「精神」はバイオティック・シナジエから生じ，アイデア，感情，感覚の表明を許しながら，人間のエネルギーを制約し水路づける社会制度の創出を可能にする。精神と知性の創出は社会活動の背後にあるダイナモ（dynamic agent）である。心が可能にする社会制度は過剰な規制と不足な規制のバランスをとらねばならない。社会の有機的構造によっては規制されない知性は無駄であり，過剰に規制される知性は停滞と解体を作り出す。最適な人間の状態は，規律ある知性の使用（telesis）が創造的で十分に理解された目的のために制度を下支えするエネルギーを動員することを可能にする。

初期の社会学理論のメタファー——進化主義，有機体論，個人主義——を強調するため，我々はここでは実際の社会学の大半——制度分析——を割愛する。人間と社会は，正しく作動すると諸個人に将来の進化のコースを方向付ける自由を許す。これはコント主義ではなくスペンサー主義である。ウォード自身は続く10年に上記のアイデアをかなりトーンダウンさせたが，他は一層学問的で，理性的で，記述的な議論を与えている。さらに1905年までに，有機体アナロジーへの主要な支持者はこのタイプの推論のより文字通りの使用とともに廃れていった（Bannister 1987: 45）が，のちに「機能主義」となるものの中心的な先取りはこの時期に十分に地固めた。

アメリカの理論が3つの独自の糸に分化し始める状況を作り出しつつ，上記の初期の理論に論争の種が胚胎していた。ひとつは，サムナーとアルバート・ケラーの作品におけるスペンサーの進化論アプローチで，今世紀の最初の10年目には時代錯誤と見なされた。彼らの4巻本『社会の科学』*（Sumner/Keller 1927）はこの伝統の絶頂を代表した。『社会の科学』は1899年に着手したが，サムナーの健康の衰退がかつての弟子，ケラーにプロジェクトを完成させることを余儀なくさせた。この初期の開始とサムナーがスペンサーの多くのアイデアにコミットしているせいで，『社会の科学』はスペンサーの『社会学原理』と非常によく似ている。それは民族誌のデータと歴史的データが満載されている。それは社会組織の未開パターンと進んだパターンの双方を追求している。それはもっと複雑な形の社会組織の展開（今日でいう「分化」）を追跡している。

2番目の有力なアプローチはチャールズ・ホートン・クーリーによって最もうまく代表される。1870年と1890年の間に社会学を取り上げる我々のほとんどは，スペンサーの扇動で

* サムナーの『フォークウェイズ』（1907）は元々は『社会の科学』の一部を意図していたが，サムナーが持ち帰って，別途に刊行したものである。

そうしたことを彼は認めている (Cooley 1902: 263)。しかしクーリーは、スペンサーの大きな欠陥は「シンパシーの欠点」と「人間生活の構造をアナロジーによってほとんどすべて現象として」概念化する傾向にあることをすぐに付言している (Cooley 1902: 266)。クーリーにとって、「社会秩序の有機的全体はパーソナリティと同じ性質の精神的な事実であった。そしてそれらを把握するには同じ種類のシンパセテックな想像力が必要であった (Cooley 1902: 269)」。それゆえ社会組織は対面的相互行為から行為者が「共通のシンパシー感」「共通のスピリット」を作り出すことを可能にするメンタルプロセスの観点から概念化されねばならない (Cooley 1909)。もちろん、クーリーのアイデアはジョージ・ハーバート・ミード (1934) とのちの「シンボリック相互行為主義」によってかなり拡張されたが、主要な点はスペンサーの進化主義と有機体論の中では、アメリカでは精神主義とマイクロ社会学の色彩が濃く出ている点である。

一方のサムナーとケラーのマクロな進化的アプローチと他方のクーリーの大いに精神主義的社会学の間には、有機体論的社会構造観を受け入れ同時に有機的全体が維持される重要な力学として対人シンパシーと意識の重要性を重視する仲介的アプローチが存在する。実は、アメリカ社会学者にとっては、自らの任務を、社会生活の心理へのフランス的関心と制度分析のドイツ的伝統を結びつけることと定義することはよく見かける。この仲介的アプローチはフランクリン・ギデングスによって最もよく代表される。ギデングスの『記述社会学と歴史社会学のリーディングス (1906)』は彼のアプローチの二重性を照射している。この本の前半の大半は様々の社会をマクロないし進化的観点から描写している。次いで人口、集団組織のパタン、集団の同質性と分化の過程に移行し、次に数百頁にわたって、「社会的精神」が追求され、最後に「社会組織」のマクロ構造分析に戻っている。しかし20年のちに、ギデングスは社会現象をはるかに壮大でないタームで概念化し始め、彼自身の思想の変化だけでなくプロフェッションの変化を示している。彼の『人間社会の科学的研究 (1924)』はこのシフトを最もうまく例証している。ここでは、ギデングスは「社会的パタン」を「社会的変数」として考察し、変数によって指示された現象の中に原因を分類し、抽出し、査定する方法が、社会的テレシス (social telesis) のために知識を利用するという旧来のアピールとブレンドされている。

初期の理論のなかには矛盾が存在したが、この矛盾にも拘わらず、マクロ進化的メカニズムは知性による統一感を与えた。しかしながら、この矛盾——今日ではマイクロ対マクロ論争と呼ばれよう——は大半のアメリカ社会学者が第一次世界大戦後までにマクロ進化的関心を放棄するにつれて、次第に明白になった。フランスではデュルケムが彼の1890年代のマクロ進化的有機体論的著作 (Durkheim 1893) を社会構造の認知的精神的支柱への関心で

補完した（Durkheim/Mauss 1906, Durkheim 1912）同時期に、ウェーバーは「理解」を擁護し、『経済と社会』の精神主義的な最初の節を書いた。ほぼ同じ時期にアメリカの社会学者は全く同じことをした。フランスではこの関心は「構造主義」に進化したのに対して、ドイツではより現象学的になった。そしてアメリカではこの認知的支柱は、改革主義運動がインスパイアした統計的サーベイへの関心によって強化され、ソーシャル・アクションへのリサーチとインタビュー、質問紙、具体的な経験的セッティングの中の個々の行為者の「態度」「定義」「志向」の統計分析の使用を鼓舞した。

だが初期の理論家のあいだの理論的アイデアの対立は明白にならなかった、少なくともしばらくは公にならなかったし、経験的リサーチへのシフトは急激には起こらなかった。遅延の理由の一端は「素人が」彼らが覚醒された宗教改革主義世界観の代用として壮大な、宇宙論的理論を受容したことにあった。世紀の変わり目にスペンサーがアメリカで大いに人気を博したのは、社会学の初期の理論が素人における（科学的に見え、改革と進歩を方向付ける）グランド理論へのニーズを満たした度合いを物語っている。

初期の理論家の間知的分裂を覆い隠す理由のもう一つの部分は、上記の理論家が彼ら自身の経歴を更新し、社会学を制度化するための相互の支持の基盤としてお互いを必要とした事実にあった。ウォード、ギデンクス、スモール、エドワード・ロスのあいだの相互の支持は社会学史の以降の編成にとって重要であった。

4. アカデミアにおける物質的資源と組織資源の追求

その1. 社会学を教える

アメリカ社会学におけるアカデミックなポジションと学科の創設はヨーロッパのそれと全く対照的であった。アメリカにおいて1880年までは、「社会学」と「社会科学」は大学やカレッジにおいてシニア（4年制向け）に要求される道徳哲学講義の代理として、すでに教えられていた。典型的には、この講義はパレイの『自然神学』をテキストとして使い、1880年代にこの講義の「社会学」「社会科学」（両タームは同義に用いられた）への置換が迅速に進められた。しかしながら、この時期のアメリカのカレッジでは、いくつかの領域の講義を教え、教える負担が重かった教師に、何ら特定の資格が期待されなかったので、講義内容は定例化されなかった。この講義の実質的なほとんどの教師にとって、特に従来の道徳哲学の代用として講義を教えた教師にとって、「社会学」はパートタイムの余技であった。上記の初期の教師のほとんどは社会学ののちの発展にほとんど貢献した者はいなかった。利害が関係した教員が大学を去るときには、この講義はカリキュラムから消滅した。

講義でのテキストの使用——今日まで残るアメリカ独特の執着である——は書き方と考え方に大いに影響を与えた。教える聖典の存在はメタ理論と総合（アルビオン・スモールの「一般社会学」と呼ぶもの）への需要を作り出した。そのうえ、そのようなメタ理論は論文や博士論文のトピックとなり、これまでのキイ概念をうまく排除したり、信用を失わせたある型の概念図式に導いた。聖典となるテキストの系統的な比較の最初の帰結のひとつはこれまで非常に説得力を持っていた有機体アナロジーへの不満であった。「理論」はかくしてアカデミー化されるようになり、理論的著述が伝統的なアカデミー形式を取り始めた。

創設者にとっての理論の重要性にも拘わらず、この時期の博士号を授与する二つの主要学科（コロンビア大学とシカゴ大学）における理論的トピックを執筆する威信にも拘わらず、それは、アカデミック社会学が腰を据える資源基盤とはならなかった。むしろ社会学は社会科学の残余カテゴリーとしてアカデミアの中に基盤を確保した。その状況は社会学が、他に何らアカデミックなホームを持たない慈善と矯正のような改革主義的トピックに責任を持つことを許した。イェール大学のような少数の大学では、上記のトピックは社会学の責任とならず、特に大学院レベルでは、上記の領域の別の講義が重視された。ここでは、社会学に慈善組織で働く資格として役立つ学位として神学の訓練が完備し始めていた。シカゴとコロンビアの特に修士課程の院生の大半はそのような経歴と主義に関心があり、大学はこの需要に応えるために教員を雇っていた。大学院レベル、学部レベル双方の大半の社会学科にとって、そして新興の学科の基礎資源のひとつは、改善と改革に定位した講義に対する学生の需要であった。

上記の講義が登録学生にアピールしたのは、社会悪に関して何かをしたいという学生の願望ないしは自己理解の彼らのニーズにあった。初期の社会学者の多くにとって、この種の講義は彼らの出自した村落世界の理解法を提示した。かくして学生の関心という資源は、改革の衝動の影響だけでなく、農村生活の衰退を潜り抜けてきた人々に自己理解を提供する社会学の力にもかかっていた。もちろんこの衰退は続いており、通常のものとなっているので、その分析を聴く聴衆は消滅した。ワードや他の創設者にとって聴衆を獲得するのに役立つ改革のイデオロギーの願望は、大学研究のプログラムへの需要の十分な基盤ではなかったために、社会学はそれらを「科学」の主義に転換することによって学生を確保しようと努めた。事実これはまさに初期の社会学者の自伝的語りで用いられている言語である。彼らは慈善の衝動から社会的世界を理解する願望に、この願望から社会的世界を「科学的」理論のなかで知性化したい願望に進んだことを述べている。

その2. 統計学の取り込み

バランスのいい報告書、ないしは論争的でなくルーチン化するデータ収集を通じて政治的支持を確保できたときに栄えた多くの労働統計局は、改革者にとって不十分な用具であることが判明した。改革者は事実を確認するためのもっと優れたもっと多様な用具を求めた。改革のリーダーとコロンビア大学の関係が親密であったニューヨークでは、この願望は社会科学科の創設の支持、社会学の中にギデングスの席を設け、大学と改革政治の相互関係への尋常でない関与へと導いた。コロンビア大学はかくして、社会学と改革リサーチの主要な用具、コミュニティ・サーベイの間で発達した複雑な交流に唯一ではないものの主要な場となった。

コミュニティ「ソーシャルサーベイ」は1905年から1930年の25年間に盛んになりサーチ形態であった。ロバート・パークが強調したように、ソーシャルサーベイはアメリカ市史の特定時期にみられた地方自治体改革と管理のニーズに合致したので栄えた。彼の言葉では、「ソーシャルサーベイ運動は公共の利益の二つの流れ——福祉運動と効率運動——が結合したときに限ってはっきりとした形をとる (quoted in Taylor 1919: 6)」

サーベイ運動は社会学が小さな共同体だったときには、異質な大事件であった。ラッセルセージ財団はこの時期に行われた数千のサーベイをリストした (Eaton/Harrison 1930)。リストには労働統計局の初期の時代に行われたそれとよく似た労働サーベイの多くが含まれていたが、それ以外の専門特化したサーベイも含まれていた*。上記のサーベイの大半のひとつの目立った特徴は、それらが何らかの種類の政府行動、制度行動ないし「プランニング」の基礎として使用された点であった。パトロネジ問題の観点からみたサーベイ運動の目立った特徴は、政府がスポンサーになったものがほとんどなかった点である。大半はサーベイ運動がそのためになされるコミュニティの援助を伴っていた。多くはコミュニティからの自発的援助で専ら着手された。そのような援助は、サーベイがコミュニティの啓発という公的な目的を達成しているために得られたのであった。地域の援助への依存は、サーベイする者が公共性を生み出すこととコミュニティの利益をリストに入れることに最大の注意を払うことを意味した。その結果、サーベイする者がローカルなプロフェッショナル人のメンタリティと認識と管理の合理性の要請に寄り添った。

サーベイでなされた統計分析は通常は謙虚なもので、これは啓発の手段としてのサーベイの効用にとって重要なものであった⁶。この単純さはサーベイの急速な普及にとっても重要

* 25巻の教育に関するクリーブンドサーベイ(1915-1977), 11巻の健康と病院に関するサーベイ(1920), 7巻の余暇に関するサーベイ(1916-1920), 犯罪に関するサーベイ(1922), 芝生に水を撒いたり石炭の予算のようなミニチュアに関心を払った教育サーベイも盛んだったし、学部運営を専門職化したいと望んでいた教育学部の大立て者の支持を受けた。

であった。というのは、目立って有用な「結果」を生み出すのにテクニカルな付帯条件はほとんど必要なかったから。サーベイのドラマテックなインパクトはしばしばかなりのものであったが、サーベイのアカデミック社会学への貢献はささやかなものであった。

だがたぶんもっと重要な他の影響があった。アカデミックな社会学者は一部のサーベイを自ら実施し、他の多くのサーベイに協力者として参加し、それから学習し同時に助言をしている。もう一つのそれほど直接でない影響は、社会学者のリクルートメントとプロフェッショナルな経歴の確立である。サーベイは一般的に出版を助成し、野心家にとってはプロフェッショナルな文献への登竜門になる。1920年代の拡張期にアカデミックな社会学者になったビックリする数の人々はローカルサーベイの参加者としてスタートしていた。

その3. アカデミックな妥協

にもかかわらず、サーベイは農学部を除いて大学の社会学にアカデミックホームを見つけ出すことができなかった。この理由の一部は単純であった。サーベイはフルタイムの活動であり、教授はクラスを教え、学生のリサーチを指図する必要がある。サーベイを行うのに必要とされるエキスパートはおおむね組織的なそれであった。社会学者が「エキスパート」として病院や余暇の研究に貢献できるものはほとんどなく、これらのサーベイが取り組む市役所のニーズは監督的性質のものであった。事実市役所の調査部局とソーシャルワーク、行政の職業系学部はあふれていたし、それらはサーベイ運動の監督サイドの成長したものであった。しかし社会学者は公共生活の中に占めるなんら特定の監督のニッチを持っていない。彼らはそれを開発することに失敗した。これが当時のアメリカ社会学を取り巻いていた事実であった。もっと厄介だったのは、サーベイと社会学のアカデミックな伝統の一部としてすでに確立していたものを統合することであった。これは両面を持つ問題である。統計学の「意味」の問題と社会学の「科学的性質」と位置の問題。後者はアカデミックな尊敬という社会学の要求と歴史学、経済学と一緒にのテーブルでの位置の問題である⁷。

理論と統計社会学の関係をめぐる潜在的な対立に直面して起こったことはアメリカ社会学の歴史と現在のプロファイルにとっても重要であった。というのは、アメリカ社会学の独特の国民性は、両者を調停する妥協の産物であるから。この調停はコロンビア大学でギデングスと弟子によるリサーチ実践のモデルに取り込まれた。このモデルの広い実現は新しい研究資金給付体制が構築される第一次世界大戦後まで待たねばならなかったが。理論とリサーチを結びつける難しさは彼の「社会学の理論化」のごく初期からギデングスによって痛感されていた。本質的にはギデングスはコントの三段階の法則を蘇らせ、カール・ピアソンにならって、彼は神学的、形而上学的、実証的段階を思弁的、観察的、計量的段階に変換した。ギデ

ングスはかくしてこれらが観察によって確かめられ、究極的に計量的にされる希望と期待を持って、思弁的段階の概念問題を解決できた (Giddings 1901)。

この種のリサーチ——すなわち、理論と理論の経験的検証——は改革サーベイとは全く異なった物質基盤を必要とした。もっと重要なことには、大学の学科の時間的制約と組織的制約の中で成し遂げ得た。それは結果の抽象的性質の故に、啓発の目的に容易に奉仕し得ないが、実践目的とアカデミックな目的の双方に役立つ。このアプローチの拡張の主要な障碍は統計の訓練を受けたスペシャリストの必要であった。これは社会学をアカデミックな学問として組織化することなしには克服できない障害であった。

その4. 組織の問題

アメリカ社会学会を創設する集会はアメリカ経済学会の集会で開催された。その招待状には、経済学会、政治学会がそれぞれの学者に与えるのと似たサービスを社会学者に行うことが意図された全国社会学会を形成する適否を論じる意図が述べられていた (quoted in Stern 1948 : 91)。招待状にはそれを受け取った者にとって明白であったこと、つまり社会学者が組織化に失敗したことが強調されていた。この失敗は「社会学者が様々な線に沿って仕事をするにあまりになれてしまったことと、しばしばラデカルに異なった見解を抱いている事実」に帰せられた。にもかかわらず招待状は「同じ問題群に関心を持つ者が定期的に集い、他の知識分野で非常に頻繁に科学の前進に貢献してきたアイデアの交換、企画の比較を可能にする何らかの種類の組織による独自の公認が存在するように思われる」ことを理由に挙げていた (quoted in Stern 1948 : 91)。1905年にASSが結成された。

特に熱狂的で伝道熱心な「キリスト教社会学者」の集団、特に George Herron を除いてその組織は社会学を発展させることに関心のある者は誰でも歓迎し、第一次世界大戦前夜に、組織は急速に拡大した。1920年までに、それは約1,000人の手頃な規模に成長し、アメリカ統計学会、アメリカ政治学会、アメリカ歴史学会にほぼ匹敵するまでになった。図1.1はこの増加を描いている。だがASSは研究出版のためのアウトレットの点で姉妹学会に比べてはつきり弱体であった。今日でも当てはまるように、多くの学会員は彼らの刊行物のための別なアウトレットを持ち、学者としての威信のための別な基盤を持っていた。例えば、多くの社会学者はアメリカ統計学会の会員に留まり主要な参加者であったし、AJSよりその学会誌に掲載したので、ASS創設後もしばらく社会学者に代替組織基盤を提供した。AJSはASSの公式のリサーチ・アウトレットとなったが、その分野の多くの者から嘲笑と疑惑で見られた。

にもかかわらず、社会学会を創設するという組織の達成は、他の学会組織の状況と違って、

社会学の博士の学位を持つ者の数が依然として非常に少ないという事実には照らすと注目に値することであった。図 1.2 が記すように、第一次世界大戦終結時までは、学位取得者は年間 20 人前後であった。この事実は、社会学の博士号保持者は学会会員の小さな比率であることを物語った。博士号生産の長い歴史と高い生産水準を持つ他の社会科学は最小限の訓練しか受けていない会員にさほど依存しなかった。それに引き替え社会学会はアカデミック人でなく専門的な訓練を受けていない会員の比率が高かった。

これから見ていくように、社会学の中の博士号取得者という中核の成長の上記の不規則性は社会学にとって有意な人口統計的影響を及ぼした。博士号取得のこの初期の世代は戦間期に学会の主要な役職を占めた。1930 年までの学会創設者のほとんどが退職死去したことは、若い博士号保持者が ASS の重責を担ったことを意味し、1914 年から 1924 年にかけての 10 年間の博士号の生産の不規則性は、上記の者が地位を長く占めたことを意味した。そのうえかれらが 1940 年代に退職したとき、新しい空白がアメリカ社会学リーダーシップにドラマチックな変化の機会を作り出した。

第一章注

1. ある場合には、意見の不一致は、マサチューセッツのベンジャミン・バトラーのような南北戦争において名声を博した改革運動の人物達によって指導された分派政党の結成に導いた。バトラーはニューオリンズの軍司令官の時に富を再分配し、(銀のスプーンを愛好していて、スプーンというあだ名をもらうほどであった) 彼の指揮権を解かれた。だが彼はまもなくして議員に選出されてアンドリュー・ジョンソンの弾劾裁判のマネージャーの一人として働いた。それから高位の職務をめぐる一連のレースに加わった。そのなかには 1884 年の「緑を回復する労働者と反独占党」の大統領候補も含まれる。その一つとして、全国的地盤を獲得できなかった分派政党の失敗は改革者が政党よりも、争点志向の組織に彼らの努力を向けさせた。これらの改革組織が成功したのは、部分的には彼らの追隨者に排他的な忠誠を要求しなかったことであつた。実際、様々な改革組織のディレクターの職と彼らの出版の主導権と彼らの目的は非常に重複する傾向があつた。

2. アーサー・ヴィデッチ／スタンフォード・ライマンの『アメリカ社会学』(1985) はアメリカ社会学史のいかなる考察も無視し得ないテーマである、アメリカ社会学思考の宗教的ルーツについて入念な証明を与えている。我々の議論では、宗教的遺産は人々が社会学者になったり、社会学の仕事を支援するモチベーションとして登場する。

3. マサチューセッツは本格的な地質調査を設立した最初の州であり、そのパタンは多くの州によって模倣され修正され、最終的に連邦政府によって引き継がれた。そのようなものは労働統計にも当てはまった。究極的には、州の大半が何らかの種類の類似部局を設立した。しかしながら、他の州の部局のひとつもマサチューセッツ調査によって遂行された規模の社会調査に取り組んだところはなかった。

4. マサチューセッツ部局によって用いられたクエスチョニアの「空欄」に基づく質問は現代の基準では好ましくないワードであったし、質問のリストは非常に長かった。質問の多くは雇用されているものの数というきわめてシンプルな数字での回答を要求したが、質問の多くはある言明についての賛否を尋ねる単純なものでなく、意見が求められるものであった。今日の状況の様々な好ましくない特徴（食料の高価格など）の原因について回答者の考えを尋ねる複雑な問いであった。問いの完全なリストに進んで回答しようとする労働者も雇い主もほとんど居ないことが判明した。ほとんどは単純な回答ミスであった。それをした者の回答は素っ気なく、不十分な回答であった（Bureau of Statistics of Labor [Masachusetts] 1870: 23）。労働統計局は奇妙、無意味な回答を追跡（フォローアップ）したが、回答率は改善されなかった。初期のサーベイのひとつでは、労働者に問い掛けられたクエスチョニアには137の質問が含まれ、268人に送られ114人から返送された。空欄を埋めるのに十分な識字がない未熟な労働者には、可能な場合は口頭で面接がなされた。雇い主宛の前払いの封書で送られたものは1,248通、送って返送されてきたのはたった217通であった。労働統計局は彼らが尋ねる質問の体裁の不適切さを十分自覚していた。最初のリポートで「質問をする技法は学者のそれではなく主人のそれであった。人が理解していないことについて尋ね方を知るのに多くのことを学ばねばならなかった（Bureau of Statistics of Labor [Masachusetts] 1870: 16)」。これは労働統計局が背景、特に歴史的情報を入手するのに費やした努力を正当化するのに使われた。食料の高価格の原因のようなトピックに特別の洞察を持つエキスパートとして回答者を扱い、回答者の側の沢山の推論を要求する意見を尋ねる質問は20世紀にもみられるものの、労働統計局の50年のなかで、質問を尋ねる手段は改善された。

労働統計局はその法的制約の中でその方法を洗練する以外の代替肢を一切持たなかった。オフィスのWrightの最初の行動のひとつは、責任感があり返答するのに十分な識字のあるはずの聖職者に郵送することによる郵送法をテストすることであった。1,530通のうちで544通だけが返送された。そのなかには白紙のままのもの、「我々の尋ねているものは我々のビジネスでは一切ないことを冷やかしてほめかすものもあった（Bureau of Statistics of Labor [Masachusetts] 1870: 24)」。ライトはたまに使用することを除いて郵送法を断念し、

個人面接に依拠した。特に彼らの記録を調べるために雇用主を訪ねた。それははるかにベターな協力を生み出した。労働統計局の仕事の多くは賃金データの二次分析であったが、データの大半は面接を行う労働統計局の「特別の代理人」によって集められたものであった。これらの面接は精密な面接手続きへの遵守によってでなく面接者の対象者理解によって支配されていた。これは個人面接が優れている理由のひとつと見なされた。ライトはのちに、どんなに正確に定式化されていても郵送穴埋めでの質問は回答者によって異なる解釈がされる傾向があり、生じるデータはそれゆえ個人面接によって得られる結果より劣ると釈明した。

5. ダーク・ケスラー『社会学的冒険』（1985）は学生の改良主義の目標を理論への関心に転換する過程を描写している。貧者によりベターな援助の仕方を学ぶためにシカゴ大学社会学科にいった、宣教師の息子であったE.E. ユーバンクの場合、その転換は完璧であった。彼は理論のヨーロッパの作り手の敬虔な学び手を離れた。同じストーリーは他のライフ・ヒストリーでも繰り返して語られている。そのウイスコンシン大学の学科へのロスの着任がコロンビア・アプローチの拡張にとって肝要であった（ギデングスの弟子の一人）ジョン・ギリンは、グリーンネルのアイオワ・カレッジでの学生時代（そこの応用キリスト教学の教授）ヘロンの力強い説得によって初めて社会学の考えに触れたことを思い出している。ギリンがのちに思い出す彼の講義のひとつは「キリスト教社会学」もう一つは「社会学」であった。このメッセージはギリンの心に30年のちにもまだ生き生きと残っていた。「キリスト教のプレゼンテーションは私の若々しい想像力に翼を与え、私の熱烈な情熱に合理的なはけ口を与えた。そのときまで私にとってキリスト教は物事についてのある教義を信じることを意味していた。ここといまその唯一の実際のはけ口は自分自身の情熱と衝動をコントロールし、自分の同胞をキリスト教に改宗させることというネガティブなものであった。ヘロンでは、キリスト教の目的に全く新しい方向が与えられた。ここでは、キリストの精神に反対の社会的悪魔が存在した。彼のプレゼンテーションでは、キリスト教はこの悪魔への挑戦であった。上記の悪魔はそれらを治癒するのを助けるために個々のキリスト教徒に対する個人的呼びかけとなった。すべての人間のキリスト教徒の目的は自分自身の魂を救うだけでなく、社会を救うことでもあった（Gillin, BPUC, pp. 5-6.）」。ギリンは実際田舎の教会の牧師の道に進み、行為の社会的帰結への彼の敏感さが、教会の年長者が結婚を決める仕方やコミュニティの若者が彼らの支配から逃れる仕方に強い好奇心を抱かせた。このコミュニティはコロンビア大学の修士論文の主題となった。しかしコロンビア大学社会学への彼の旅は直接ではなかった。彼は牧師職を離れる決心をし、キリスト教を社会問題に適用することについてもっと学ぶ目的を持ってニューヨークの組合神学校にいった。彼は神学の学位を修了する傍ら、ギデング

スの社会進化の講義に登録した。最終的に社会学の学位を修了するまで留まり、ダンカー派に関する有名なコミュニティ研究の博士論文を書いた。

ギリンは「私の足を聖職者から遠ざけ、社会学の道に向けさせた出来事は全く偶発的にみえたことである」と書き記し、これらの年月を振り返ると私の好奇心が私の感情を常に圧倒していた」と振り返っている。しかしその優越は終わることを知らなかった。「長年の私の知的好奇心は社会の問題のいくつかを解決したいという旧来の願望と結びついていることに気づいた (Gillin, BPUC, p. 11)」。これはギデングスの全世代の弟子だけでなく、スモールの弟子のテーマでもあった。我々は以下で、1930年代にギリンによって典型的に示された社会学への補充の帰結のいくつかをみるであろう。しばらくは、補充と再生産の制約を考察する必要がある。ギデングスとスモールのようなどんなに多くの人々がヘロンのような「キリスト教社会学」を貶めたり、批判しようと、彼らは学生を社会学の大学院プログラムに惹きつけるのに上記のような人物に依存していた。他にも源泉があったが、それらは数が少ない。ギデングスはクラーク大学の G. スタンレー・ホールから心理学の博士号を受け、ギデングスの弟子のフランク・ハミルトン・ハンキンスによる講義でギデングスの1896年の『社会学原理』に接したオーガムのような、同族分野出身の弟子も何とか惹きつけようとした。しかし選択制が完全にアメリカのカレッジに定着する前の、学部段階の大学に広く社会学者が分布するのが神学部である以前の最大多数の潜在的補充者は、(述語がない)

スモールが気づいていたように、この塊の潜在的補充者を放棄することは、大学院プログラムとしての社会学にとって自滅であろう。スモールがまだコルビー・カレッジにいたときにウォードとのごく初期の議論から、補充の必要はスモールの関心事であった。スモールが「道徳哲学」に置き換わる講義でウォードの考えを紹介した1880年に、彼はウォードの反宗教的言明を封殺し、ウォード自身がそれらを穏便なものにするよう督励した。ウォードの応答は辛辣であった。「私は知能の低い者のために書いてきたのではない (quoted in Stern 1933: 165)」。スモールの忠告はウォードが共有しなかった関心事、学生がしようと思えば容易に拒絶したり無視できる題材を提示する教師の関心事を反映している。しかし補充が起こったプロセスはデリケートで、補充はしばしばギリンのいったように偶発的なものであった。一方で、上記のプロセスの維持は社会学科に社会福音運動というプラクティカルなサイドによって魅せられた聴衆にアピールする教員(例: ヴィンセント)を持つことを要求した。他方で当時世界の中で最大の聖職者養成センターのひとつであった組合神学校の在校生が講義を受講でき、神学から社会学に転向できる当時のコロンビア大学の幸運な配列を保持することを要求した。実際、上記のパスは全く注意深く維持され、自身が会衆派の牧師の息子であったギデングスは個人的には転向の任務に十分にふさわしい人物であった。

6. 19世紀を通じて、ヨーロッパの「道徳的統計家」は公式統計家によって記録された比率間の関連に因果解釈を与える問題と格闘したが、結局成功しなかった（Porter 1986: 151-192, 240-255）。この系譜はメーヨー・スミスにとっては元々の源泉であった。彼は幻滅がヨーロッパ人の多くの間に定着した後も、社会統計学の科学的意義と潜在能力を信じ続けた。純粹社会学と統計学の間に一線を画するか、どちらかが併合することによって社会学はこの系譜と競争することができた。スモールとヴィンセントのテキスト（1894）は、その理論の有機体論内容に親和的な題名の使用によって、社会学の経験的内容の問題を解決した。その解決策は統計比率間の関連というトピックには容易に広げることのできないものであった。メーヨー・スミスは両者の対立にきわめて明快で、含まれる問題にきわめて敏感であった。メーヨー・スミスの主要な社会学的著作『統計学と社会学』（1910）のスタイルと主張は、彼と彼の弟子の見解だけでなく、ギデングスの方法論的著作登場前夜の社会統計学の地位とカール・ピアソンの哲学的メッセージのギデングスによる完璧な消化を物語っている。源泉素材は道徳的統計学者のそれと同じ、センサス材料と生命統計、犯罪統計であった。しかしながら、章構成は斬新な公式スキームに従い、社会学的目的、統計的データ、科学的テスト、内省的分析を含んでいた。

この書物は（社会組織を取り扱い、研究対象に社会のなかの人々の関係に横たわるように思われる法則を持つ科学）社会学に対する統計学のサービスに関する章で始まる。「法則」によってメーヨー・スミスは普通の経験法則、すなわちある現象とその現象が存在する条件の間に介在する不可欠な連関を意味すると述べている。この場合には「社会組織の諸事実とこれらの事実が相互に関連する仕方」。上記の経験的法則の「総合」によって、「我々が社会組織内の変化が向かっているように思われるゴール——時には社会学とも呼ばれる社会哲学をもつ——を発見する」ことができる。しかし「基本的なことは、それからそのような総合が合成されねばならない社会組織の諸事実の研究である（1910: 1）」。これは統計学が到達する記述的法則とスペンサーやウォードの進化主義の一部であるトピックスの種類との関連を定義し、記述的经验法則の「基本的な」地位を主張している。蔑視の意味では決してない「哲学」とそれを呼称する以外にそのような総合の可能性を傷つけることは何も述べていない。「社会学は、ある大きな中心的真理の発見が帰納的方法から演繹的方法に我々が変更することを可能にする発展段階にまだ到達していない（1910: 2）」。しかし重大なのはそれよりもかなり悪いのである。たとえ我々が上記の前提を認めるとしても、我々は「二つの大きな困難に直面している。——ひとつは描写される社会現象の数の膨大なことと複雑さである。第二のものは社会的力を測定する、つまり社会現象相互の関連の強さの度合いを推計する精密な手段の欠如である（1910: 3）」。過去の社会学者は複雑さに直面して間違っ

選択をしてきた。ひとつは、自分の科学の材料としてすべての歴史学、すべての考古学、旅行者の観察のすべてを取り上げ、この素材のすべてを等しく価値あるものとして取り上げてきたことである。しかしメーヨー・スミスはこの素材のすべてが等しく価値があると信じることは不可能であることに気づいた。それをすべて等しく価値あるものとして認めることは経験的社会学の問題を「マネージできない」ものにするがゆえに、我々は選択をしなければならない。彼が推奨する選択は、社会学のすぐ目の前のゴールを選択することであった。原因結果、共存、連鎖の単純な関係を追求し、生物アナロジーに基づく人為的分類（特に何も説明しないスペンサーとシェッフレの有機体アナロジー）を捨てること。「我々は社会学に材料を提供する現象の範囲と、社会力を我々が測定することを可能にする材料が扱われるべき方法がある正確さで定義する必要がある。もし我々がこれを成し遂げることができれば、我々は現象の多様性によって圧倒される危険から逃れ、表面的アナロジーの説明という安価で不満足な道具を回避することができる（1910：5-6）」。

この議論の二律背反は力説する価値がある。統計データと他のすべての種類のデータ、法則とアナロジー、社会学の手近な目標と遠い目標。何らかの限られた範囲のデータを選択する必要性は複雑さの問題によって指令されている。しかし統計データが他のいかなる種類のデータよりも結果に導きがちなのはなぜかは不明である。統計学ができるのは、我々の注意を可能な原因結果の関係に向け、効果の度合いを測定し、インパクトの差を同定することである（1910：15）。この知識は「社会改革の可能性の唯一の基礎である（1910：16）」。そして今度はこれが社会法則の存在を予測する働きをする。統計的結果と法則の間にはかなりのギャップがあることを認めているが、統計学はこの目標に「我々が道を進むのを助ける」と主張する。いずれにせよ、「我々は早急に解決することを要求する社会学的問題ないし社会問題によって囲まれている。我々は完璧な科学を待っておれない。我々是我々の前にある個別の問題に影響している条件を理解しようとしなければならない（1910：16）」。

7. この背後には説明の性質をめぐるもっと根本的な論争が存在する。ネーション誌での原理の一書評子は科学のねらいは現象の真の原因に遡ることであると説明してきた（Bannister 1987：21）。ウォードが従っている真の原因の系譜は、戦間期の批判者にとって引き続き問題の焦点となった。ピアソンと同様、ギデングスは19世紀の終わりまで洗練されてあったとしても少数の洗練された科学に関するコメンテーターによって遵守されたこの系譜を拒絶した。しかしそれは傑出した知的系譜を持つ伝統であったし、それは科学者も社会科学者も原因に関するピアソンとマッハのもっと極端な定式にいらいらを表明する箇所であった。それはピアソンが知的発展の以前のステージからの形而上学的、アニミズム的残滓と弾劾す

る概念である (Peason 1900 ; cf. Giddings 1922 : 127-143)。この解決策は至る所で受け入れられているわけではない。スモールはギデングスの見解を嘲笑した。1901年スモールはウォードに次のように書いた。「ギデングスの最後の書『帰納的社会学 (1901)』は私に何のプラスももたらさなかった。彼は主観的解釈という素晴らしい才能を持ち、それについてのある種の刺激が存在する。しかしもしこの種のことを真の社会学と私が見なすなら、社会学の仕事全体に不可知論を發することは私を安心させるだろうと思っている。「それが良いことでないし、良きことになり得ない」ことは私の通すことのできる唯一の判決である。…我々の2, 3の物理科学人はそれを見咎め、彼らはそれを絶対的な戯言と糾弾する。私はそれがそんなに悪いものとは思わない。…私はそれを刺激的な香辛料とみなすが、それが手数料の紙幣の山を形成するなら、餓死のダイエットとなろう (quoted in Stern 1937 : 305-306)」。同じ手紙の中で、スモールは「ロスがこの書物の書評を申し出たことと、スモールより明らかに熱心であること」を報じている。彼はのちに、「自分はロスと長い会話をした。ロス自身はギデングスとの職業柄の丁重な仕事を幾分はみ出したと思っている」ことを書いている (quoted in Stern 1937 : 306)。これはスモールが賞賛のニュアンスで自分の関心を明白に提示しているものである。

第2章 焦点理論が壮大理論に取って代わる：戦間期のアメリカ社会学

【梗概】戦間期はアメリカ社会学をユニークなものにした多くの舞台を用意した。ゆっくりと社会学は大学、短大のカリキュラムに浸透したが、理論と方法の標準化が広く受け入れられることなしに起こった。標準化のこの失敗にも拘わらず、ロックフェラー財団によって設置されたグラント・システムの下で方法論は次第に計量的なものになっていった。しかし戦争前、サーベイと計量分析（特に態度測定）が栄えて行くにつれて、リサーチの行い方をめぐってかなりの不一致が見られた。理論の領域では、サーベイで行われた多くの経験的研究の多様なリサーチ知見を統合するためのごく少数のパラダイムが存在した。有機体論と進化主義衰退のうねりの中で、行為に注目する社会心理学の登場があったが、この焦点は統一的理論とは見なし得ないものであった。依然として旧来の壮大理論（ピティリム・ソローキンの著作はその代表）も存在したが、大半の概念化は狭く、都市化、人種関係、非行、文化遅滞等、の限定的トピックを考察した。

方法と理論のシンボリックな統一の欠如は社会学の組織基盤のますますの断片化を反映し

ていた。ASS 会員は 1930 年代に減少し、他の社会学組織が簇生し、そのため会員は様々の組織に分裂した。そのうえコロンビア大学とシカゴ大学の社会学支配は弱まりつつあった。SRA の研究資金給付が重視されるにつれて、エリートと非エリートの亀裂の広がりが見られた。

序論

年少の社会学者の目からは、社会学の知的な発達は第一次世界大戦後に復活した。1929 年にジェシー・バーナードは次の観察を行った。

1918 頃、不毛の時代が終わりを告げ、社会学の開花（絶頂）が始まった。クーリーの『社会過程』、トマス、ズナニエツキの『ポーランド農民』、ロスの『社会学原理』、パーク、バージェスの『社会学という科学入門』、オグバーンの『社会変動』、バーナードの『本能』、ギデングスの『人間社会論の研究』、サムナー、ケラーの『社会の科学』、雑誌 *Social Forces* の創刊、シカゴ大学におけるコミュニティ研究の開始についてだけは言及の必要がある (J. Bernard 1929: 48)。

最後の二つとトマス、ズナニエツキの『ポーランド農民』の出版 (1918) は社会学が財団と慈善事業家から獲得し始めた新しい資源の結果であった。パーク、バージェスの教科書の出版 (1924) とロスの教科書は競争的な教科書市場の広がりを意味した。他のものは、おおくの沈黙の保留付きながら創設世代によって共有された理論的見解の破壊と残る部分の変容を意味した。サムナーのアイデアに基づき、弟子のケラーによって進化的方向に転じられた『社会の科学』(1927) はイエール大学における異質な伝統のための基本テキストとして役立った。実際ケラーは社会学というタームの使用を拒絶し、ASS に加入することを拒絶した。バーナードの『本能』(1924) は旧来の理論スタイルの範例であった一概念の行動主義的批判であった。この作品は心理学との新しい関係の前触れであった。クーリーの『社会過程』(1918) は旧来のテキストで論じられた社会過程の相互行為的特性に関心を払った。

ギデングスの最後の著書 (1922) とオグバーンの著書 (1922) はコロンビア社会学の系譜の世代交代を表していた。ギデングスの著書は物質的条件と集団で共有されていた観念のずれに関心が集中していたが、彼はこのずれを社会進化の背後にある淘汰の過程という一般的概念の一部として理論化した。これに対してオグバーンは「文化のずれ」を壮大なスキームとは独立に、「経験的に」取り組まれるべきはるかに狭い問題に含めた。壮大なものから狭

く焦点を絞ったものへのシフトはこの10年の特徴となった。部分的にはこれは社会学のパトロネジ源泉の変化に対応するものであった。アカデミックな社会科学のための金銭的援助の源泉として、財団特にロックフェラー・ファミリー財団の登場が1920年代に大きな影響を及ぼした。社会学はこの基金に与り、基金を確保し分配するために作り出された新しい組織構造が社会学に有意な影響を及ぼした。

ロックフェラー事務官のねらいのひとつは、社会科学を「リアリステックなもの」にし、その曖昧な目標に叶う様々の種類の社会科学の多岐にわたる支持はその指令に従う社会学者のキャリアと名声に甚大な影響を及ぼした。究極的には、ロックフェラー財団によるこのイニシヤティブは民衆の啓発（public edification）に献身する旧型の「ウォード的」社会科学観の名での反抗を生み出した。その反抗が失敗したとき、社会学の境界を変え、独自の狭い学問に忠誠心を持つ新しい社会学エリートを認証した。

本章ならびに次章で我々は社会学がファンドを与えられる一連の配列を検討することによって、社会学の資源基盤の変化を考察するつもりである。もちろん上記のファンドは社会学者が一般公衆にアピールするために持った唯一の資源ではない。学生の社会学への需要、学会組織、雑誌、評判の内部分配も社会学の生命の特徴であり続けた。しかしこれらの各々は新しい様態の資金によって影響を受けた。

1. 物質的資源とサーベイ運動の専門職化

その1：社会・宗教研究所（ISRR）

戦間期の初期の計量的に最も洗練された大規模社会学調査はジョン・ロックフェラー二世による支援を受けたISRRによって実施された。元々は社会・宗教サーベイ委員会と呼ばれたこの研究所の研究プログラムは、旧来のボランティア労働による「サーベイ」モデルを制度としての教会研究に広げようとする野心的試みの失敗から発展したものである¹。1919年に創設され、ヴェルмонтにあるウインザー・カウンティの田舎の諸教会についての戦前研究に基づいた、教会間の世界運動の目的はアメリカのすべての福音主義教会をサーベイすることであった。1920年の夏に数千の教会に関するデータが収集された後で運動はつぶれた。ISSRは教会間の世界運動仕事の一部を完了し、その援助下で集められたデータを分析

¹ より大規模な研究はソーシャル・サーベイ運動の「タイタニック」であったが、何ら個別の聴衆を持たない無駄な事実の収集の形をとったこの運動の難点は早々に明白になった。E.C. リンデルマンはサーベイの多くの非尋常性とサーベイは改革の見地からは大いに落胆するものであった事実を語りながら、1924年にサーベimaanは、7つの異なった機会に、7つの異なった機関によってサーベイされた南部の田舎のような、多くの馬鹿げた出来事を生み出したことを観察した。

する任務に着手した。ISSR はまたデータのチェックとして再調査をした²。

手綱は常にロックフェラーによって固く握られ続けた。というのは、「彼は嘗為に寄付することは決して考えなかったし、それに対する彼の年間の寄付は不定の持続の保証は一切なかった (Fisher 1934 : 7)」。プロジェクトがオーソライズされた後で、役員会による干渉や命令の痕跡はなかった」ものの、役員会とスタッフは、「ロックフェラー二世が彼の年間の寄付額を部分的に翌年に提案された特定のプロジェクトが彼に対して起こしたアピールに基礎をおいたことに気づいていた (Fisher 1934 : 15)」³。しかしながら、鳥かごは黄金であった。グラントはフルタイムリサーチ・スタッフ約 45 人を雇うのに十分であった。これらには、ロレンス・フランク、ルーサー・フライ、ロバート・リンドのようなのちに社会調査において重要となった人物が含まれていた。

組織が 1922 年に改称したとき、設立された目的は実用的であった。資源の経済的利用と協力を促進することによって、「達成されるべき任務に科学的探求と正確な知識と広い地平の援助をもたらすことによって (Fisher 1934 : 8)」, 「プロテスタント系キリスト教の社会・宗教勢力の財の有効性を増進すること」。ロックフェラーから金銭を求める際に、研究者にとって基本的問題は明確であった。その中で「科学」とかなり曖昧な「実用的」目的が調停されうる姿勢を定義することである⁴。

ロックフェラーの顧問の中には、数人の訓練を受けた社会学者が含まれていた。その中に、社会学者ジョージ・ヴィンセント、心理学者ピアズレイ・ルムル、経済学者兼統計学者 E.E. ディがいた。彼らの考えは科学の性質についてのロックフェラー財団の考えと結びついていて、彼らが処遇するアカデミア人の見地からは、これらの考えは大して限定的なものではなかった。ロックフェラー慈善団体は「リアリステックな」研究と呼ぶものを支持し、純粋なアカデミズム、理論、道徳説教と見なすものを拒絶した。しかし社会科学の性質に関

² その大半は経験を積んだアカデミックにおいて有能な人たちによって集められた高品質のデータであった。そのなかに、ギデングスの教え子ウォーレン・ウィルソン (1912 年に家庭伝道プレズピテリアン委員会でサーベイワークを始めた) と州立大学の多くの社会学教授達 (ワークをするために自分たちの制度から解放された) を含んでいた。サーベイ方法自体は素人からプロのデータ収集に移行し始めた。

³ 資金給付の方法は内部から生成され、原則的にロックフェラー代表を含む役員会によって承認され、スタッフによって完成された提案の選抜を通じてであった。約 6 人からなる上級テクニカルスタッフは「目的、方法論、代表サンプルの範囲と性質、分野手続き、タイム・スケジュールと予算」を開発する部分と協力の下に通常は働いた。上級スタッフは常にプロジェクトを最終編集を通じて緊密な監視下に置き続けた (Fisher 1934 : 20-21)。

⁴ 財団の改良主義的力と目的に大いに冷笑的であったギデングスが IRSS でなされたルーサー・フライのコロンビア大学博士論文「田舎の教会を診断する：方法の一研究 (1924 年)」の序文でこの定義過程に寄稿している。「真の科学的マインドが常にするように、フライは事実の確定と事実と事実の (語の統計学的意味での) 相関に自己限定し、彼の研究が明らかにした条件の是認、否認のすべての問いを彼の著作を読む読者に委ねている (Giddings 1924 : v)」。これは常に追隨された定式ではなかったが、それは外部から課せられた改良主義的ねらいと「リサーチ」を形式的に調停する手段であった。

する彼らの考えが上記の広い発想（世界中のキリスト教徒の実践的種類の社会行動と見なすもの）に合致するかどうかの判断はアカデミア人に委ねられた⁵。

ISRRの後援で刊行された「社会学的」著作の多くの外的形式はスタッフの関のひとつが「科学的」を「統計的」と等値していたように、高度に統計的である意味で実在的であった⁶。フライの博士論文の場合、42の表と20のチャート、5つの地図を含み、沢山のピアソン相関を報告していた⁷。フライの博士論文に現れたISRRの公準は、「その社会的経済的環境を知らないではいかなる教会の機能も理解することもできない」というものであった（Fry 1924: xi）⁸。外部の力へのこの関心は、ISRRによって行われたキリスト教教育の調査に影響

⁵ この期間を通じて、ISRRの目的の声明に含まれる、「社会科学のテストされた方法と諸原理」という表現の中のタームが何を意味するか知ることは困難であった。のちにシカゴ大学で総長として活躍しおそらく洗練されていたであろうルムルの場合には、スローガン以上のものではなかった証拠がある。Mortimer Adlerはシカゴ大学での彼と一緒にある講義を教えたことを語っている。アドラーが論理学と科学の真の性質に関して彼の教員に講義している間、ルムルは「仏陀」のように座っていた（Adler 1977: 151-52.）。この情熱を行動科学に捧げ、1938年から1953年までSSRC理事の座にあり、のちに第二次世界大戦中將軍として任務を与えられたFrederick Osborneの場合にも似たような疑問が生じた。この後者の能力では、スタウファーの上官として君臨した。上記のケースの各々において（リンドの場合も）、上記のパトロネジ仲介者のサポートはパトロネジシステムに特有でない特徴にではなく、彼らが扱う考えについての彼らの個人的査定に依存していた。

⁶ この分析形式に与えられた根拠は実質的にギデンクスによって定式化されたピアソン流の科学哲学であった。「社会法則は…所与の状況で働くことができる刺激の複数性の故に物理法則と同じ確実性を獲得することはできない。…この基本的事実の結果はその後のハードで範疇的定義の社会法則に到達する可能性の排除である（Giddings 1924: 33）」この研究は方法内容でピアソン流であることを告白している。それはまた測定に関するギデンクスの考えにも執着している。もちろん教会の本当のねらいは精神的なものでそれゆえ直接に測定できないものである。ISRRは「心理的要因」と態度に関心があって、いくつかの研究はそれらを測定している。その中には、「欺き、自己制御、協力のような特性」を測定しようと試みたコロンビア教員大学でなされたものが含まれる（Fisher 1934: 15）。「態度」というタームはISRRのなかの宗派の声明（cf. R.W.Fox 1983: 113）にも登場するが、フライは「キリスト教徒の態度」「兄弟分」を直接測定する試みを断念した。それらは教会の出席、平均に比べての寄付等で間接的に測定されうると述べている。上記の「測定尺度」は相関の試みの対象である（Fry 1924）。

⁷ 1930年に到達した相関法の終点は「内的趨勢（*）とそれに外部の力が及ぼす影響の二つの観点から教会を評価する洗練された技法であった（Fisher 1934: 18）。上記の研究の分析単位はコミュニティか教会のようなコミュニティ制度であった。この理由は実用的でかつテクニカルなものである。アメリカの村落研究のように、多くの偏相関を含む相関研究の推論の要求は個人へのサーベイは禁じられていた。ブースの野外のレリーフのデータに関するユールによる再分析のように、戦略は制度そのものの生態学的相関ないし尺度特性を使用することであった（Yule 1899）。『アメリカの農村（Brunner/Hughes/Patten（1899））』において分析された140の村落は非常に時間のかかる、したがって経費のかかる入念な相関分析の対象であった。対照的に、6,000の回答を持つサーベイはそのような分析にはかけられ得ないものであった。

（*）趨勢はここではフライのテクニカルな意味で、因果相関、法則というタームの代用として用いられている。

⁸ リンドとISRRのペーパーに基づく上記の闘争の最良の歴史的考察は、Richard W. Fox（1983）のものであった。しかしながら、社会理論ないし社会調査の学問史に対するたまたまの注釈は信用できない。またリンドの学問的オリジナリティを過剰に述べている。リンドの登場を議論する際に、二つのことを肝に銘じておく必要がある。

（1）ニューヨーク・プレジビテリアン主義の知的環境はその問題意識の点で非常に社会学的であった。特にプレジビテリアン家庭伝道理事会においては社会学者とコミュニティ宗教研究と長いつきあいを持っていた。この理事会はリンドに最初の説教任務を与えた。（2）社会学者、リベラルな神学者、聖職の改革者の組織的ネットワーク、人的ネットワークは広汎に重なっていた。以下はヘレン・リンドの口述の回想（HML）に大いに依拠している。

を与えるようになった。最初の研究はセミナー学生の社会的出自や教会の働きを条件づける「環境要因にほとんど注目を払わなかったのに対して、11年後に行われた二度目の研究は、上記の二つの事項に詳細な注意を払った (Fisher 1934: 18)」。「機能」というタームは便利なものであった。それは初期のサーベイ運動と関連していたさまざまな「能率」キャンペーンで用いられていた意味で、スポンサー的、「社会学的」、実用的であった。フライの結論では、相関的結果は因果的に取り上げられる。経済的状況のような「環境」条件は教会の生活のあらゆる側面に影響を及ぼしていることが知られている。例えば人口密度は教会出席を増やす。フライの最後の節は、ヴェルмонтにあるウィンザーカウンティ諸教会の世代交代に関心を払い、教会の衰退は実際には起こっていないことを見いだしている。

「変革」と「外部原因」の二個のテーマは ISRR の最も有名な傑作 (1923 年に始まり『ミドルタウン (1929)』で実を結んだ) であった。その研究はスポンサーによって、偏相関 (partialling) と多重相関に力点を置いた非常に経費のかかり、高度に計量的なアメリカ村落の研究をプロデュースしたフライとブルナーによってなされた仕事の続きと見なされた。『ミドルタウン』はのちに ISRR の管理者によって、一世代以上遡る、「小さな都市の生活と制度のあらゆる側面の相関性を明らかにするパイオニア」として描写された (Fisher 1934: 18)。それはまた ISRR の内部資金給付システムの純然たる成果であった。プロジェクトの後継者になった研究者、ロバート・リンドは若き神学校卒業生で、ISRR の宗教教育課の補助ディレクターであった。この作品はボランティアからプロのサーベイへの移行期を例証している⁹。ISRR のディレクターの一人であった Shelby Harrison は、研究されているコミュニティの宗教指導者は、その研究を定式化することに関与することを望んだ。その代わりにリンドは妻と、3人の助手と ISRR の専門スタッフの助けと様々のプロの社会学者のアドバイスを受けて、インディアナ州のムンシーで調査を遂行した。

今日のアカデミック人にとっては、この種の構造は脅威であった。大学教員アメリカ連合の委員会は「調査を組織し、アカデミア外部の財団、学会、産業プラントを通じてその援護を提供する傾向」に驚いた (quoted in Ogg 1928: 113)。不安は十分に根拠のあるものでないことが判明し、1930年代の ISRR の運命は社会科学にとっての客観的な教訓として役立つ。ISRR の統計に志向した研究者が彼らの立場の強さを過度に見積もった程度を明らかにしたがゆえに、『ミドルタウン』のストーリーは姿を現した。

⁹ ISRR の一部の研究は大学の研究者に委託された。太平洋岸の東洋人の問題についてのパークの研究は ISRR によって一部資金が出ていたが、1924年の東洋人排除法が緊張を和らげるという彼の主張に対する ISRR のスタッフのエディティングを受け入れることを拒絶した1925年に関係は途絶した。ISRR のニューヨークのリベラルはパークの主張を彼らの研究の改革主義教育のねらいと両立するとは見なさなかった (Matthews 1977: 114)。

プロジェクト自体は ISRR においては嵐の歴史を持った。その理由は形式の欠如であった。草稿が最終的に提出されたとき、リンドはそれは出版できないと告げられた。出版を助成するのは ISRR の仕事であったものの、スタッフはその草稿はおもしろくなく、宗教的でないと思った。しかしコアのテクニカル・スタッフが非統計的作品と見なした、方法論の問題が草稿拒絶の重要因であった。ニューヨーク・ネットワークを使うことに長けていたリンドはコモンウェルス基金でジョブを手に入れ、(ロックフェラーが援助しているもう一つのオペレーション) SSRC でウェスレー・クレール・ミッチェルのアシスタントの地位を手に入れた。彼は草稿を放棄しなかった。ニューヨーク財団で重要人物であった、序論を書く約束をした人類学者クラーク・ウィッスラーの支持を獲得した後で、(ISRR の指導者が彼に約束したものは不可能であったので) 自分自身でそれを出版する許可を ISRR から獲得した。ハルコート出版に草稿を見せ、大幅なカットでそれを受け入れられたその本はベストセラーとなり、リンド自身は重要な、民衆に知られる人となった。コロンビア大学は彼に Ph.D を贈り、社会科学に彼を任命した。

もっと直接的な関心は ISRR の運命にある。ISRR の仕事は歴史上統計社会学で最も先進的で大量の試みであった。それまでの努力はもっと多くのデータを持つことに向けられ、洗練された分析の使用にそんなに傾注されてこなかった。『ミドルタウン』の拒絶エピソードが何らかの兆候とすれば、研究者達は傲慢にも彼らの仕事を誇りに思っていた。彼らが驚いたことには、ロックフェラーは 1932 年に ISRR に支援を止めることを告げ、進行中の 5 つのプロジェクトを終了する合意に達した。財団のファンドの回収と 10 年後のプログラムに対する幻滅は珍しくなかったが、ISRR の状況は異なっていた。仕事はプログラム・ディレクターの興味でなく、ジョン・ロックフェラーの二世の個人的興味であった。ISRR の解体が明らかにしたのは、成果はロックフェラー氏と彼のいつも側にいるアドバイザーの目から見て証明されるものではないことであった。これは統計的社会科学の綱領が何ら存在しないし、ISRR がせっせと追究してきた洗練された分析に圧倒的に実用的価値が一切存在しないことを物語る。そのうえ、ロックフェラーの気まぐれへの全面的依存はもう一つの客観的な教訓であった。同じ種類の教訓は、他の二つのロックフェラーへの依存体である SSRC とシカゴ大学にも与えられる。どちらも結果はそんなに単純でない。

その 2：シカゴ学派と経験的調査

シカゴ大学へのローカル・コミュニティ調査委員会 (LCRC) のグラントと後続の SSRC を設立するグラントは、コロンビア大学で 1890 年代に訓練を受けた政治学者であった、ロバート・メリアムの影響力に基づいていた。社会学はシカゴ大学でのロックフェラー財団の

主要な関心ではなかったものの、ロックフェラー・グラントの主要な受益者であった。ISRR のグラントと同様、シカゴ大学に LCRC を設置したそれは、プロポーザル・グラントとひと付きでないグラントの中間の性質であったが、いくつかの点で異なっている。ISRR のグラントはチームに基づいて編成されたリサーチ・ショップに対して与えられたが、LCRC グラントは選択された活動への助成の使用によって社会科学に繁茂するアカデミックプログラムを方向付けし直そうとする試みである。ロックフェラー家とシカゴ大学の関係は独特のものである。シカゴ大学はロックフェラーの金で創設されたので、大学はロックフェラー家の特別の関心事である。結果として、研究資金給付の総額は例外的に高かったが、資金給付の事実は例外的ではなかった。社会科学研究へのさほど制限はなかったが少額のグラントは 1920 年代に多数の大学に対して行われていたから。

LCRC への社会学の貢献を支配していた人物はロバート・エルザ・パークであった。彼のアカデミックな背景は哲学にあり、彼はコンゴ改革団体のためのジャーナリストとしてとブッカー・ワシントンのための秘書として働いたことがあった。パークは 10 代に彼の社会的アイデアを発達させた。彼は 1913 年に W.I. トマスと通信し始め、シカゴ大学に移り、1919 年にサマースクール講師からフルタイムの教員に昇格し、次第にシカゴ大学の社会学科の中心人物になった。パークは独特の知性であったが、彼のアイデアが重要になったのは偶然のこと something of an accident があった。学科は 1920 年代初めに全く別の方向に向かっていたかも知れなかったが、社会学科が創生期にあったときに LCRC が設立された。学科はその初期のメンバーの大半を死亡、転出、管理職への昇進で失い、1918 年の W.I. トマスの強いられた辞職の深刻なトラウマから回復できないでいた。

社会学科はパークがファカルティのフルメンバーになったとき、実質的に白紙の予定表であったので、LCRC グラントはパークがシカゴ大学に新しい種類の社会学を作るのを可能にした。それを特徴づけたのは二つの特色であった。(1) 独自の研究倫理、(2) 旧来の改革の伝統との新たな関係。これらは各々がうまく学生達に伝えられたが、パークの個人的カリスマ性と LCRC によって作り出されたコミュニティへの社会化に非常に多く依存していた。このコミュニティそのものは、リサーチ・ファンドのかなりの部分がローカルで支配されていた事実によって成り立っていた。コントロールは集権化されていた。プロジェクトはグラントのより大きな目的と合致し、シカゴ大学の教員の有力メンバーの支持を取り付けねばならなかった。かくしてパークは例外的に力を持つ地位を握った。LCRC グラントは学際的委員会によって支配されていたものの、パークは ISRR に存在したような直接の吟味の重責を負うことなく、社会学内のファンドの分配に高度の影響力を持った。メリアムの役割はグラント全体のなかの社会学の仲介的、二次的役割であったので、パークは彼のアプローチをロッ

クフェラーの代表に詳細に承認をとりつける——これはロックフェラーファンドの他の受け手の時間と労力の大半を奪うものであったが——必要がなかった。にもかかわらず、パークによって行われた仕事は重要な点でロックフェラーのアジェンダと合致していた。LCRCによって行われたリサーチの焦点は絶対的意味で「リアリステック」であった。LCRCが取り組む問題は戦前の改革運動の長い歴史を持つほとんど恒常的な問題であった。

パーク社会学の学生へのアピールもまた重要であった。当時の他の大学院プログラムと同様、シカゴ社会学は社会問題を解決したいという願望によって動機づけられた新入りの院生とともに始まった。パークはこれらの学生の改革精神を独自の種類の社会学的好奇心への強いコミットメントに変換した。ロックフェラーのファンディング分配担当者が「リアリズム」の方向に後押しした旧来の改革運動の態度は現在の感受性とは無縁だったので、パークと同僚が達成した主題の変貌を2、3のフレーズで捉えるのは難しい。例えば、シカゴ学派の有名な研究のひとつは、ポール・クレッシーによるタクシー・ダンスホールの研究であった。そこでは「ダンサー」は舞踊室ダンスを装った、支払う客に対するマイルドなエロチックな活動に従事していた。この種の「不健全な」活動は戦前の啓発的改良家の主要関心事であったが、この関心事の性格はピューリタニズムと規制力への素朴な信仰の奇妙な混合の形態をとった。クレッシーの研究は、性的娯楽という感情を積載したトピックに、統計分析の偏りのない「客観的」やり方でだけでなく、この主題を道徳的おぞましさのない共感的理解の正当なトピックとする仕方でアプローチした¹⁰。

主題のこの変貌の重要性と「問題」へのアクセスの獲得はシカゴ社会学に補充された者の目からは特に巨大であった。それらは「善行主義」から離れて知的のぞき趣味に似たものに向かう変貌を突き進んだ¹¹。対照的に、ギデンクスが支援したコロンビア大学での研究は、

¹⁰ 「社会事業組織」特集に充てられた1912年の*Proceeding of the Academy of Political Science*は、当時の改革組織の卓越した代表者による数編も含まれていた。これらは政府統計の重要性、サーベイ法、強欲な雇い主、児童労働の搾取者、借家オーナー、の規制だけでなく、公共娯楽の規制の必要に力点を置いていた。この主題に関する改革者のメンタリティの感覚は娯楽に関する論文を考察することで獲得されよう。このトピックに関する論文の著者、勤労少女の娯楽資源委員会の議長であったベル・リンドナー・イスラエル女史は「ペンシルバニア州、Wilkes-Barreの町（人口約65,000）では、5,000～6,000人が夜にダンスホール、映画ショー、演芸劇場などのあらゆる種類の娯楽場を訪れている。そこや他所に我々は同じ基準、同じ危険を生じる同じ資源、これらの場所を利用する同じ部類の人々を見いだす」と語っている（Israel 1912: 123）。この問題の唯一の解決策は制定法、免許制、監査官のオフィスによる規制である。市単位の社会主義と享楽を殺す主義のこの独特の並存の道徳的政治的基礎は、レクリエーションのニーズに備える団体の義務の理想である。「しかし我々は娯楽の装いの下に民衆に商業的に与えられるものへの監視の目を向けねばならない（Israel 1912: 126）」。

¹¹ このタームはマチウスのものである。彼は改良主義の主題に関するパークの様々な格言を引いている。「私は福音主義の社会学派には所属しない」と彼は彼の知り合いに断っている。「あなたは人々のために何をしたのか」という学生の質問に対する彼の回答は、「何もしてこなかった」と怒鳴った（Matthews 1977: 116）。学生たちが通過した個人的変貌は20年前のギリンのようなコロンビア大学の学生によって描かれたそれと全く違いはなかった。しかしそれは異なった方向の変貌、それより

どんなに遠くても「計量化」という究極目標を目指して科学化の三段階を通り抜ける明示的な理論的アイデアの周りに組織されていた。

しかしパークはある特別の種類の中身に関心があった。我々がマサチューセッツ州の労働統計局の仕事（それはそれが判定しようとする世論との論争の中で始まった）を思い起こすなら、我々はパークと弟子達がかもっと根本的なことをしていると信じたのはなぜかを知ることができる。東洋問題についての彼の著作についての彼の記述を検討せよ。

太平洋岸に関するこれまで考察は主に東洋的なものの存在によって提起される問題の長所を確定しようとしてきた。つまり論争になっている問題を調停し判定しようとしてきた。この研究は主としてそれらの持つ長所と無関係に、これらの問題が実際にどのようにして生じたか、社会状況そのものにおけるその源泉は何か、を個々の男女の経験の中に、人間性一般の中に、心の既存状態の中に学ぼうと努めてきている（quoted in Matthews 1977 : 114）。

それらを形成する局所的体験の中で意味と態度を解釈する点でこれは一種の知識社会学であった。これはまた一般的戦略であった。パークがパーク／バージェス（1924）の第一章でいっているように、社会学は「人間的環境に由来する人類の修正に関わる（quoted in Raushenbush 1979 : 82）」。

上記の定式はその曖昧さの故に衝撃的である。パークは社会学を事例によって教え、方法

もっと強くて知性化の弱いものであった。ギデンクスは神学者を装った抜け目のない合理主義者であった。これはしばしば偽神学者の弟子達自身にとって魅力的なものであった。彼の弟子、特にチェイピンとオグバーンは一種の客観性のカルトを作り出した。それは非常にネガティブに感情と一体化する偏見に向けての態度であった。それは個人的等値 personal equation（星の位置を記録する観察者の独特の系統的誤謬を指す天文学のターム）が最小化される状態と対照的である（Chapin 1920 : 14）。これは（十分に準備されたインタビュー・スケジュールのような）測定手段の使用と復元可能性を通じての普遍性の野心を承認する定式であった（Chapin 1920 : 14）。パークとトマスはこの態度の知的背景を共有していた。パークがまだブッカー・ワシントンのために働いていた1912年に、トマスはパークに「自分たちは一緒にニューヨークに行ってあなたが会いたいと欲している、私があなたに会わせたいと思っているデューイ、ロビンソンのような人物と会話を持つべきである」と提案する手紙を書いた（quoted in Raushenbush 1979 : 70）。ロビンソンは合理主義をけなすコロンビア精神の体現者である歴史家で、ハリー・エルマー・ジョーンズのような社会学者に絶大な影響を及ぼしていた。バーンズは学際的流儀のコロンビア大学の中で歴史家でもあった。パークとロビンソンの間にははっきりした違いがあった。パークは自分のところにやってきた中流階級の学生のマナーと感受性をまねし引き替えに彼らにエートスと感受性を与えた。ロビンソンと彼の仲間とは特に反宗教的で、ギデンクスが彼自身の遺言書で受け取ったアイデアに対する迷信的な敬意と見なしたものに関心を持っていた。（ギデンクスは社会事業家 E.T. Devine に対しては侮蔑していたので）彼らはその敵対者を侮蔑していたものの、改革の感受性そのものは馬鹿にできなかった。ギリン、オードム、ゲールケ、チェイピン、シェントンのような社会学におけるロビンソンの弟子たちは強い社会的使命感を保持した。彼らは統計的アプローチと「数に照らしての検証は偏見に対する最良のガードである」というアイデアを通じて感情移入の問題を解決した。これは彼らが規範的結論の可能性を社会学的リサーチの結果と見なし、このステップを社会学の一部と見なすことを可能にした。

論と理論双方の公式の言明を避けた¹²。かくしてそのモデルは理論的教義ないし方法論教義として容易に伝わらなかった。シカゴ大学ではそれは没入と徐々の浸透を通じて教えられた。社会学的営為の独自性についての共有された感覚をもって、社会学的発見をしたという体験感覚を持って、あるコミュニティの監視下でリサーチを遂行するという体験は、没入を知的感情的生活の最も満足のいく形にした。シカゴ大学内の社会学のための資源基盤の見地からは、パークモデルの有意な影響は、それがその遵法者に社会学者としてのアイデンティティを与え、学生が自らの勉強を始める素朴なモチベーションを保持させた。実際、一部のケースでは、虐げられた者烙印を張られた者のロマンチック化の要素は彼らの新たなアイデンティティの基本成分となった。

1928年のオグバーンのシカゴ大学への就任、コロンビア大学からの統計思考の移植は計量「科学」としての社会学観とパーク流の内容の問題へのアプローチとしての社会学観の何らかの折り合いが開発される必要があった。1930年代初め、学科内に政治的妥協が起こった。パークの弟子とオグバーンの弟子の個人的関係とオグバーンの側のギデンクス版の社会学の理論的意味合いを薄めたことが1930年代初め、緩やかに働くコンセンサスを生じさせた。様々のスタイルの社会学的リサーチを架橋する「シカゴ」アイデンティティが生まれ、LCRCが終了した後1930年代を通じて学生達に魅力があったことが判明した。「シカゴ社会学」は学生達によって十分に需要されたので、学科は1930年代のそれから大いに低下したグラント支援水準でさえ大きなアカデミックプログラムとして機能することができた。

シカゴ大学の社会学モデル——多くの学生を抱えるアカデミックな風土と「ゲマインシャフト的」雰囲気——は社会学以外の学問と他の学科には容易に広がらなかった。結果として、独自のシカゴ業績の登場は文化的に仕切られた学問の始まりを印した。理論的方法論的トピックが論争されるだけでなく、バラバラの実質的には自律的形態の知的生活が存在するそれ。1930年代に発生した他のサブカルチャー同様、シカゴ大学はこれまで社会学に通用していたものの多くを排除した。シカゴ大学初期のPh.Dの多くを特徴づけていた感傷的なキリスト教は排除されたものの中のほんの一部であった。スモールの弟子達によって気に入ら

¹² 弟子の一人ポーリン・ヤングはパークが理論に関して強いた職業的社会化らしきものを捉えるパーク体験を思い起こしている。

かつて院生の時に、私はある労働者のセクト集団の職業態度に関するある論文を急いで複写した。私は彼を喜ばそうと思ってパーク博士にこの論文のコピーを私の概念思考をつけて誇らしげに送った。彼の返答は私の口に灰を詰め込むようなものであった。「秘密結社のグリッパとパスのように聞こえる概念の中に詰め込むことで、せっかくな集めたデータを無駄にした (quoted in Raushenbush 1979: 184)」。

これはパークが抽象や概念思考を拒絶したことを意味しなかった。彼女は概念は「実際には社会状況の手っ取り早い定義である (quoted in Raushenbush 1979: 184)」ことを学んでいた。

れた概念分析の多くもまた消滅した。鋭い世代分裂も見られた。古いタイプの「シカゴ」社会学と新しいシカゴ社会学の間に強い反目が存在した。

シカゴモデルが失敗した場所は、研究資金支援基盤の確保にあった。政府にも財団にもそのリサーチのための実質的に継続する市場は何ら存在しなかったし、この種の活動は公衆への販売を通じての文筆活動として支援を受けられる類のものではなかった。公的アジェンダに上っている問題の解決のためにパークによって開発された社会学的見地の価値はリアルではあったが限られていた。シカゴの公衆はシカゴの社会学科の仕事に気づいていたが、パークは市の指導者からのいくらかの支援を開拓することに成功したが、非行を減じることを意図したプログラムの場合のようにシカゴ学派の洞察を実践に変換する試みは、提案されている「解決策」の精密でない性質の故に、ほとんどインパクトを持たなかった。仕事の効用を証明する努力の払われるはるか以前に、社会学科によってなされた仕事に対して特別の感情を決して持ったことのなかったシカゴ・エンタプライズのロックフェラー支援者が彼らの資金給付方針が意図された結果を生み出すのに失敗したことに落胆を表明した。

1920年代のグラントは学者達を純粋に学問的関心事への関心から離乳させることが意図されていた。財団の事務官はそれを応用可能な社会的知識を生み出すことのできる方法で諸学問の発達段階のひとつに過ぎないと嘲笑した (Fosdick 1952 ; Matthews 1977 : 112)。1930年に書いているがルムルは最後のステージは十分素早くは到達されることはなかったと不満を述べ、「そのビジネス、法律、行政、ソーシャルワークの部門を持つ社会工学の方向に向かう」リサーチを要求した (quoted in Matthews 1977 : 112)。言葉に営為が続いた。光は純粋社会科学の上からすべて遠ざかり始めた。

1927年に与えられた第二の大きな LCRC グラントは更新なしの5年間のグラントであった。ルムルはそのときまで惨めであった社会科学部門の会長に就任した。この状況は新たに就任したシカゴ大学総長の Robert Hutchins によって複雑なものにされた。彼は計量社会科学に非常に懐疑的で、オグバーンに対して個人的な敵意を表明した。学際的リサーチの自己の構想の失敗で落胆していたメリアムは、専門的な行政を打ち立てる任務に転換したが、ロックフェラー資金源泉がシカゴ大学に SSRC を通じて寛大にもそれを支援した。

同じ種類のロックフェラー財団がシカゴ大学にほどではないが、ノースカロライナ、コロンビア、ハーバード、スタンフォード、イエール、テキサス、バージニアにアカデミックな社会科学研究所設立を援助した。ノースカロライナだけが社会学科が基金の主要受益者であったが、このリストはのちに主要な社会学大学院プログラムとなる学科を持つ大学がいくつか含まれていた。ノースカロライナ大学のハワード・オーダムの社会科学研究所は、戦間期の南部の社会学研究の主要なセンター (『ソーシャル・フォース誌』の発行元) であり、

人種問題の南部のリベラリズム重要な勢力であった。オーダムは黒人労働歌の収集のようなプロジェクトを通じて沢山の知名度を得ていた。彼はまた他の財団から基金を得るのにも成功していた。ロックフェラー財団はノースカロライナ大学にその基金を大恐慌によって不可能にされてしまったあり得ないことに置き換えることを期待した。当初5年であったロックフェラーグラントは1932年に、減額されたものの3年間更新され、1939-1940年まで年額5千ドルに過ぎなかったが再び更新された (Johnson/Johnson 1980: 115)。これは大学をフックに引っかけたいという財団の願望を反映していた。交渉の一部に更新の条件として、大学に行政学部を作ることを強制した (Johnson/Johnson 1980: 112)。

にもかかわらず、オーダムは独自の「サブカルチャ」の特色を持つ社会学者の共同体を作った。その学科は相関法のたまり場であった。それはオーダム自身のコロンビア大学偏愛の帰結であったがそれだけでなく、1920年にコロンビア大学社会学で最初の多重相関の博士論文の著者である T.J. Woofter, Jr がいた結果でもあった。オーダムの問題意識は地区的なもので、ノースカロライナ大学は北部の大学に比べて貧弱であった。にもかかわらず、学科は南部から優秀な学生をリクルートすることに成功した。その多くは地区改革の理想によって主として惹きつけられ、学問としての社会学よりも南部に限られた問題に志向していた。

農村社会学は大部分財団への依存から解放されていた。1925年の Purnell Act (法) が農業大学、農業実験施設における社会調査に政府支援を制度化した後もずっと農村トピックは財団の大きな関心事ではあったが。しかし状態は理想的なものではなかった。制度の政治的性格が地区の農夫の性格特性やコミュニティの友好性と教会に通う性質を賞賛する以上のことはほとんどしなかった。この実践はギャルピンが彼の自伝で述べているように、「公衆の目から見て農場の生活を悪化させる一般的態度」と戦う願望によって承認された。この実践の背後にあるもっと正当な動機は農村の士気であった。というのは、「何らかの理由で農場生活の値打ちを下げるのは、私の心にとって、農場生活を向上させようとする者の中の非常に貧しい心である (Galpin 1938: 48)」。しかし、政治は他の方法で出版を制限した。農村社会学が研究支援の大きさの代わりに支払った代償は上記の政治的範囲の強い内部感覚と計量化に対する重い偏見であった¹³。独自の資源基盤は農村社会学を他の社会学から部分的で影響

¹³ ギャルピンは農学部で農場生活研究ユニットの所長としてワシントンでの彼のテニユアの間に研究の事例を与えている。調査は州立大学と共同で Carl C. Taylor, Carle Zimmerman, Dale Yodar たちとともになされた。その研究はほとんど白人の、地主と貧しい小作、被雇用者の不平等な土地所有に関する取り決めと労働状況の大きな農村共同体を扱った。大学の農学部長が調査者が収集した写真を見たとき、彼はすべてのことから手を引き、研究は出版されなかった (Galpin 1938: 51)。ギャルピンが言及している研究は、ミズウリ州ニューマドリッドの研究であった。のちに Taylor によって「リッチマン、プアマン」としてミメオグラフが描かれた。しかしながら、この難局からの脱出法もあった。農学部で農村社会学者を配置することは、このころまでは収穫法、多産、新しい緊張等を査定するのに統計法に大いに依拠していたからだが、これはこの世代の多くの農村社会学者に方法論の厳密さの追究を通じて改革政治の困難さを回避することを鼓舞した。

のある分離に導いた。組織分離がそれに続き、農村社会学会が1935年に設立され、それ自身の雑誌を発刊し始めた¹⁴。

その3：SSRCと研究資金給付の全国問題

SSRCはパトロネジ工夫とかなりの研究資金という大きなツールキットを伴うワイドな権限を持った。上記の研究資金のほぼすべてはロックフェラー源泉に由来した。その結果リーダーシップは常にロックフェラー財団と彼らの接触の期待の観点から行動することに熱心であった。SSRCの目的は時間の経過とともに変化した。そうしていると考えていたものの、SSRCはISRRのようにパーマネントなスタッフを抱えた本格的な研究施設となることは決してなかった。1930年代まで、政府行政の合理化がその主要目的となり、アカデミックな分野としての行政機関の創設はこの時期のその努力の主要な成果のひとつであった。しかしその当初の目的は社会科学の変換であった。

SSRCの登場までは、ロックフェラー慈善団体は他の大きな財団と同様、大学に「ひも付きでない」グラントを行うことを止めていた。この状況に答えて、メリアムはアメリカ政治学会に「政治リサーチ」委員会を設置することを企てた。ASSでもリサーチの標準化に関するオーエンの名を冠した委員会と似た委員会（ジョン・ギリンが委員長）が1917年に復活した。この名の元々の委員会は1912年に作られたが、それは教え方をサーベイする任務を持ったティーチング委員会になぞらえられた。上記の委員会は上記の学問の今後を定義する政治闘争の序盤の差し手であった。各々のケースにおいて、それらは上記の若い学問に甚大な影響を及ぼす他の組織操縦の前触れであった。ギリンの委員会は1920年に次のように報告した。

我々が必要なのは、分野を地図化し、方法を議論し、協力のプランを策定し、リサーチを促進するための資金を確保する、社会学におけるリサーチに関心のある人々の組織である。我々は社会理論と社会政策の問題に関わる事実を見つけることの重要性を金を出し惜しみする委員会や議員に証明するまでリサーチを実施するための資金を提供してくれる金持ちを探さねばならない（quoted in Rhoades 1981：13-14.）。

1922年に当時のASSの会長、ジェームズ・リヒテンバーガーはまさにこの目的のために

¹⁴ 最初の編集者はチェイピンの弟子であった。そのオリエンテーションが統計学的であった別分野の知的主導権には他の弟子が含まれていた。かくして農村社会学は戦間期に統計学の伝統を維持し向上させた。しかし、社会学の代替概念は財団によって多額の研究資金を給付され、学生を惹きつけたものの、この分野の分離はそれが手本として働き得ないことを意味した。

SSRC を組織しようとするメリアムと手を組むことを提案した。彼はギリンのコロンビア大学院生時の同輩であった。ギリンとチェイピンが ASS 側の代表に任命された¹⁵。

全米リサーチ・カウンシル（当時は自然科学だけが代表を送る）に肩を並べるものを社会科学にも作る目的で、1923年の集会在3学会の代表（そのなかにアメリカ経済学会も含まれる）によってもたれた。チェイピン、オーダム、ギリンはこの新しい組織の主要な活動家であった。SSRCの政治目的は複雑で学際的工作の重視が多く、源泉を持っていた。学際性は「リアリステックな研究」というロックフェラーの理想の一翼を担っていた。それはアカデミックなアドボケートをも持っていた。メリアムは、方法の借用は政治学を「科学」にする最良の手段であり、そのような方法の使用は非学問的であると述べていた。対照的に理論は学問的である。もう一つの源泉は彼らの研究資金給付源を期待するもの、政策形成者に実用的価値のある社会科学リサーチを生み出したいという SSRC の指導層の願望であった。このねらいは SSRC の一部の参加者によって強く感じられていた。この期間を通じて、ニューヨークの改革財団ネットワーク、改革サーベイの旧来の学派メンバーであるラッセルセージ財団のシェルビー・ハリソンは SSRC の中で彼らの改良主義見解を引き続き押す有力な人物であった。このアドボカシーは組織の中でも、組織とロックフェラー財団のスポンサーとの関係でも緊張の源泉として働いた。

結局このカウンシルが支援した仕事に対する学際的推進力の有形の影響はほとんどなかった。ひとつの影響は、ASS、AEA、APSA のような学問組織（学会）内での学問批判、民主主義要求に従わない新しいタスク分野を作り出したことであった。もう一つの影響は、社会科学全体への寄進者の目から見て SSRC という権威と正当性の源泉を作り出したことである。この目的のために SSRC の自由になる手段は大きい、それがどのように使われるかは決して明白でない。1927年に3つの大きなロックフェラー・グラントが与えられた。5年間で

¹⁵ 主要な参加者の起源が示唆的である。逆説的だが、シカゴはロックフェラー・グラントの大きな受益者だったが、これらのグラント、特に巨大な SSRC グラントによって運ばれた理想は、戦前のコロンビア大学の計量社会科学の理想であった。SSRC にいる社会学者ではギデングスの弟子達が優勢であった。メーヨー・スミスの弟子ウィルコックスがそうであったように、オグバーン、チェイピン、ギリンは各々 1920 年代にカウンシルで働いていた。オグバーンは 1941 年まで働いた。ライスは 1930 年代スタッフメンバーであったし、チェイピンはカウンシルの大きなプロジェクト「社会科学アブストラクト」の長であった。もちろんメリアム自身コロンビアでトレーニングを受け、SSRC は彼の個人的ネットワークの延長であった。組織は常にシカゴのサポートを受けた、そして組織は初年度にアメリカ統計学会、心理学会、人類学会、歴史学会の代表を含むまでに拡大したが、コロンビアのスタンプは常に明白であった。スタッフは歴史家ショットウェルのようなコロンビアの元教員を含み、社会科学百科事典のような大きな企画はセリグマンのようなコロンビア大学の長老によって統括された。学会の代表者として、あるいはカウンシルに選出された委員として、カウンシル内では、コロンビア大社会学者はコロンビア大のかつての教師（ウェスレー・クレール・ミッチェル、E.C.ヘイズ）を見いだした。コロンビア大社会学者によって支配されていたアメリカ統計学会の代表者はアメリカ統計学会雑誌編集者であったオグバーン、FA.ロス、コロンビア大社会学科で長年統計学講師を務めたチャドックのようなコロンビア人脈を含んでいた。

費やされるべき一般的项目・ファンド（75万ドル）、10年期限の運営費（55万ドル）、（チェイピンによって提案され編集が任された）社会科学アブストラクト誌の刊行費（50万ドル）。楽観主義の絶頂にあった1929年には、カウンシルは7つの原則を採択した。リサーチ組織の改善、リサーチ人員の開発、リサーチ資料の拡大、改良、維持、リサーチ方法の改良、方法と研究結果の普及、リサーチ作業の円滑化、社会科学の意義についての一般の認識を高めること。これらのねらいは最終的には変化した。

SSRCによって採用された研究資金給付の様式（ダートマスでの一連の夏期集会で当初賛意を得た）は、社会生活への「科学的」アプローチの提唱者は中心問題だけを論じ、社会科学における研究をどのように変容させるかに合意にいたる必要だけがあった。メリアムによって組織された1920年代における新しい政治学に関する会議はこの戦略の完全な適用であったが、完全な失敗に終わった。会議の前の意見が一致しなかった主題であったトピックは会議の後もそのまま混乱のまま放置された。しかし会議は個人的関係を設定したり、設定し直させる効果を持った。この「ネットワークング」が総会や特別部会に出席した社会学者にとって重要であった。上記の大集会は1930年代の資金給付削減とそれらの目に見える非効率の被害者となった。

大恐慌は「純粋な」社会科学と「政策にレリバントな」社会科学の対立を政策に関係する社会科学に有利な方向で決した。この期間に着手されたプロジェクトは当時の政策問題を反映したが、その社会学への影響は大きくはなかった。コロンビア人の多くとSSRC支援の受益者はオグバーンの編纂の「近年の社会趨勢」に貢献した。それはオグバーンを有名人にし、ルーズベルト政権で盛んになった幹部会議（boards）のいくつかに彼を連ねさせた。しかしフーバー大統領によって委託された報告書自体は、（フーバーが改選されず）フランクリン・ルーズベルトが選出されたために、反古になった。報告書を作成するためにオグバーンと親密に働いた社会学者達、特にオーダムは大恐慌の間、政策形成から排除されたことに大いに不平を述べた。結局オグバーンは、マサチューセッツ局でライトとオリバーが50年格闘した事実性と客観性の同じ問題に格闘する羽目に陥った¹⁶。実際、政策科学のモデルは1875年の時と同様バラバラであった。オグバーンはライト大佐ほど政治に精通していなかった。

¹⁶ 彼がハーパー誌に掲載された「偉大な事実発見滑稽談」と題するジャーナリスト論文に酔いしれていた当時、オグバーンは Wesley Claire Michell に「我々は事実を発見しただけでなく、それらを組み立て、結論を引き出し、語の科学的意味でそれらを解釈している（Quoted in Bannister 1987: 184）」。上記のスローガンは、十分でなかった。彼は「科学」の題目の下で何が承認され、何が承認されないかをめぐって、メリアムと不一致な自分に気づいた。これは、彼が翌年 AJS に掲載した「統計学の限界」論文の背景の疑う余地のない一部であった。その論文は社会科学で「科学的に」知られるものについての非常に狭いコンセプトを提示している。

社会諸科学に影響力を行使するために SSRC が使用した基本的ツールはその目標に叶った活動研究資金を選択的に供与することであった。資金が限られていた 1930 年代は、主要なツールは学生のためのフェローシップであった。カウンシルはポストドク・リサーチ・フェローシップに資金給付した¹⁷。学者が執筆プロジェクトを完了することを可能にする a grants-in-aid program が創設され、カウンシル・サークルの年長学者が招待された会議がニューハンプシャーのハノーバーで夏期に開催された。SSRC の指導層にいる社会学者の主な共通活動がフェローシップの配分となった 1930 年代に評価選好をめぐって一種の「コンセンサス」を生んだ。従来 of 学科の境界を越えて重要事項となったのは、才能の査定とこの才能が目指すべき研究方向であった。

SSRC を作り出したネットワークの当初の施設を所与とすれば、組織の活動が経験的リサーチ、特に統計的リサーチに変更したのは驚くに値しない。社会科学者の数学の訓練改善のアジテーションが組織の継続的なテーマとなった¹⁸。ロックフェラーの代表は、経済学研究、ビジネス研究を好む傾向があったので、SSRC 意思決定の「学際的」世界では、これは社会科学全体のための提案がなされるとき、このモデルに最もフィットした人が最も支援を受ける傾向があったことを意味する。(実際のリサーチを支援する委員会を作り資金給付した) カウンシルによる検討のために選ばれた重要問題は、計量的内容を持ったトピックと農村の黒人が北部に移住することのような政策と関連したトピックであった。

2. 組織資源と社会学の権力と威信構造の変化

『ミドルタウン』の主執筆者ロバート・リンドの場合は当時の社会学者が利用できる組織資源を査定するための有用な出発点を提供している。ピティリム・ソローキンがプロの社会学者の「ギルド」としてのちにルールを敷いたものの弱点はリンドが「社会学者」になった容易さによって明白になる。乱暴にいうと、リンドはこれまで社会学を学ぶことなしに、あるいは社会学の理論と方法という中心的問題に興味を持つことなしに、ニューヨーク市の財団世界を通じてアカデミックな社会学のベストポジションに就いた聡明で社会にコミットした若者であったといえる¹⁹。

¹⁷ 34 名の社会学者に授与されたが、ハーバート・ブルマー、サムエル・スタウファー、ジョン・ドラード、チュールズ・ルーミス、ルイス・ワースが含まれていた。

¹⁸ 1929 年に農学の中の社会・経済リサーチ委員会に下位委員会が設置された。統計学の要件として数学に 2~3 学期が必要という勧告をした。さらに社会学者がより一層の数学のスキルを必要とする将来を見越して、経済学理論の学生のために計算要件の追加を勧告した (Sibley 1974: 21-22)。1928 年に、態度測定と世論に関する委員会が設置された。

¹⁹ リンドはサイドドアから社会学に入った唯一の人物ではなかった。ロバート・マキバーも社会学にプロの背景を持たない人物であった。彼は集団間緊張の削減というロックフェラーに支援された

何がこれを可能にしたのか。答えの一端は、財団のリーダーシップが社会学の内部のアカデミックなヒエラルキーをほとんど尊重せず、ハーヴァードとコロンビアの管理者も理事はいっそう尊重していなかったことであった。非常に広い曖昧な範囲の中で彼らは自分が気に入った者を社会学者と呼ぶことができた。リンドは、『ミドルタウン』が専門家によってよりもむしろ一般大衆によってであったが、好意的に受けとめられていたので、上記の範囲内に収まった²⁰。より重要だったのは、リンド自身が社会的に受け入れられ、信用を集めており、ほぼ10年間財団サークルの中で働いていたことであった。

リンドの就任時、彼がそこで個人的によく知られていた財団とサークルはその権力の極みにいた。しかしこれは彼の就任の直後にあたる1932年の大恐慌によって変化した。総じて、改革組織の多くが衰退するかISRRのような財団の支援を受けたりサーキット機関と地方自治体に置き換わったので、1920年代の社会学と改革の関係は変わってしまった。ソーシャルワークの専門職化と官僚制化は慈善団体の終焉ないし変質を意味した²¹。大恐慌とともに、改革運動とその後継者の金銭資源は社会学にとって重要ではなくなった。もちろん改革の衝動は消滅はしなかったが、衝動の知性化は次第にセラピックイデオロギーの形をとるか、プロフェッショナル利害、官僚の利害と結びつくようになった。

1930年代は、ASSがその会員が改革トピックに主たる関心がある組織からアカデミア人である組織に変貌するのを見た。大恐慌の初めに、すべての会員組織は大きな打撃を受けた。単に関心のある市民であった会員は抜けて、少なくとも大恐慌の最悪期には総会員数は落ち込んだ。しかし社会科学の内部ですら、そのパタンは分かれた。APSAは増加し続けた。

プロジェクトの評価者としてトロントの教師職からニューヨークにやってきてバーナード教授陣の一人として残った。マキーバーはコロンビア大学のポジションに格の高い社会学科の出身者よりもリンドを選んだ。マキーバーはのちに、彼が学科の支配権を与えられたときに、社会学はまだ中西部の奇形か何かと見られていたこと——啓発と先進思考の手本に固執する都市の侮辱的知覚——を回想している。両グループが欲した者は、大企業の批判者で中流階級の擁護者を自認するギデングズよりも、厄介の少ない（マキーバーの語では荒々しくない）者であった。

1930年代、1940年代のハーヴァードは似た様相を呈した。アメリカ社会学会によって定義された「社会学」は存在しなかった。社会学科が1930年代に設置されたとき、それはパレット信奉者ヘンダーソンのような非社会学者を「メンバー」として持った。ヘンダーソンについて、養成課程では非社会学者であったパーソンズとホームマンズが採用された。どちらも彼らがハーヴァードの「社会学者」となったときには、何の一般的評判も持っていなかった。ソローキンとツインマーマンは核のある社会学科ミネソタ出身であったが、彼らは気位の高いハーヴァードシステムにおいて比較的無力であった。

²⁰ ギデングズの下で戦前コミュニティ研究で博士論文を書いた3人のうちの一人であったNewell Simsは、自分とウィリアムズは類似した「方法」を使用していると主張して、アメリカコミュニティに人類学の方法を適用したと、その書のみせかけの独創性の主張をするClark Wisslerを無視した。そこに現れているのは、リンドが彼がニューヨークで相手にした聴衆は、独創性の主張が抵触の脅威なしでなされる社会学という学問の聴衆と十分に異なり、非常にかけ離れていたために、上記のこれまでの努力を無視することができた点であった。のちに見るように同じパタンは社会学理論にも当てはまる。

²¹ ソーシャルワークにおける変貌過程についての興味深い組織的考察はFrank Weedの「改革としての官僚制化(1979)」である。社会学者とこのプロセスの関係について何かを語る、より個人的な考察に、E.T. Devineの『ソーシャルワークが草創期であった頃(1939)』がある。

1930年にその総会員数は1,800であったが、ほぼ10年後は2,800であった。そして1945年は3,300であった(Somit/Tanenhaus 1982: 91-92)。図2.1が示すように、ASSは1930-1931年のほぼ1,600を例外に1930年末まで1,000前後で落ちついていた。

会員に残った人々はどんな人たちだろう。1930年代初期は、推計で博士号を授与する学科の会員数は130前後に過ぎなかった。「活動的」カテゴリーの会員数が1,634に回復した1950年まで、1,168名は「教養」課程に職を保有する者で、117名は学部課程に職を保有する者であった。かくして79%は高等教育にいる者であった(Riley 1960: 922)。しかしながらこの時期まで会員は自分を社会学者と認定する人々は高い比率ではなかった。1940年で、ASSの会員である南部社会学会の会員は28.3%に過ぎず、その数字は1980年代まで有意に増加しなかった(Simpson 1988: 63)。

ASSは到底民主的的制度といえる存在ではなかった。にもかかわらず、一般のアカデミア人の関心とニーズに責任を負うことがはるかに少なかったSSRCとは対照的に、ASSは比較的開放的であった。会長は会員全体の投票で選ばれた。既成の社会学者は政治参加から容易に排除されることはなかった。1930年代ASSは初めて大きな政治闘争の場となった²²。1930年代にひとつの分裂した学問の創出につながった様々の出来事の中に明確な系列は一切存在せず、出来事の進行を説明する紛争のような単純なものは一切存在しなかった。もっとも著名な出来事には、ASSとAJSの公式な関係の解消、それに続くASSの公式の機関誌としてのASRの創刊がある。しかしAJSをめぐる紛争はシカゴ大学の支配に対する反抗という単純なものではない。というのは雑誌AJSの批判者には初期世代のシカゴ大学卒業生も含まれていたから。その上、雑誌AJSを支配した「シカゴ」社会学者は何ら特別な「学派」でない代表であったから。雑誌の批判者が絶え間なく強調したように、彼らが代表したものは、ファンディングへのアクセスに基づいた、そしてASSプログラムへの参加と雑誌の刊行に対する権力の濫用と見なされてきたものに体现される新たな傲慢さであった(Bannister 1987, Meroney 1931)。

新しい組織舞台を求め新しい種類の組織権力を行使したいというニーズは、次第に分裂しつつある学問の各サイドで感じられた。委員会と投票を通じて意思決定する際の自主組織の通常の厄介は多大なエネルギーを消費し、恨みの感情に寄与した。結果として、1920年代

²² APSAもASSと似た紛争を持ち同じ影響を受けたが、違ったのはその衝撃であった。APSAの雑誌はこの期間を通して1950年代まできわめて長期にわたって一人の編集長によって運営された。AJSが攻撃にさらされた1930年代に批判が出なかったわけではなかったが、P.A. Oggはほぼ25年にわたってその任に居た。両事例で、批判のひとつの理由は拒絶という比較的新しい現象でなければならなかった。1940年代初めに彼の編集作業が攻撃を受けたとき、年少の経験の乏しい学者によって投稿された草稿の数に注目し、専門誌はより優れた草稿のいくつかを引き抜いていることを観察することによって、投稿の半数の拒絶を自己弁護した(Somit/Tanenhaus 1982: 97)。

の創設世代への個人的恨みに置き換わった慈悲深い張り合いは、社会内部の激しい対立、社会と社会学の激しい対立となった。これのひとつの表れは新しい雑誌と組織の急速な拡大であった。*Rural Sociology* は AJS をめぐる論争の結果として 1936 年に創設された。ASS からの *Rural Sociology* 部会の継続は 1938 年までみられ、その年に 206 名のメンバーで新生農村社会学会 *Rural Sociological Society* が開始した。

ASS の組織と境界が重なる他の個別分野地区学会がそれに続いた。例えばこの期間に、家族関係全国会議 the National Council on Family Relations、アメリカ・カソリック社会学会が創設され、主要な地区学会も登場し始めた。南部社会学会は 1936 年に設立され、中西部社会学会は 1936 年に、南西部社会学会は 1937 年に、オハイオ・バレー社会学会は 1938 年、太平洋岸社会学会は 1930-1931 年に設立された。その会員を 100 名の内部で選ばれた会員に限定するエリート招待制派閥集団である SRA（社会学調査協会）は同じ時期に設立された²³。人はこれらの創設を社会学のバイタリティのしるしと見なすかも知れないが、この時期の APSA の会員の増加との対比は何か別のことを示唆する。社会学は益々断片化したしつつあった。1930 年代の ASS はその多様な関心を包摂することに成功しなかった。

政治学に平行なもつたなかつた SRA のケースはこの文脈で特に際だっている。この組織は社会学の断片化が ASS を制御不能にし、社会学の大学ヒエラルキーが ASS 内で存続することが難しくなつたために選ばれた戦略である推挙方式を通じてエリートを作り出そうとする試みである。エリート大学の優勢が衰退するサインとして、コロンビアとシカゴによって生産された Ph.D 論文のパーセンテージは 1920 年代を通じて下がり続けている。1918 年アメリカ社会学 Ph.D トータルの 72% をピークに、1928 年 32.8% である。さらに 1925 年と 1934 年に発行された社会学科名声格付けは納得のいく一貫したストーリーを告げている。1925 年には、シカゴ、コロンビア、ミネソタがライバルを圧倒し、少し離れてウィスコンシンが。1934 年には、特別の順位なく「もっとも傑出した」学科としてコロンビア、シカゴ、ミネソタ、ノース・カロライナ、ウィスコンシンが挙がっている²⁴。

²³ SRA はシカゴ学派が優勢な組織という誤った描写がある。それは大文字で書いた旧 FHG クラブであるといった方がより正確だがそれでもまだ十分でない。ギデンズの弟子とそのまた弟子（たとえばチェイブンの弟子のジョージ・ランドバーク）が数の上では優勢であるが、第二次世界大戦以前その存続に最大の危機を迎えた。しかしバージェスのようなシカゴ学派の大物の参加に成功し、ソローキン、パーソンズのような少数の外部者の取り込みを試みた。組織の目的は社会学への科学的アプローチの促進であった。初期にはこのグループはリサーチ方法に関する重要なトピックで ASS の公式セッションよりもっと自由で、オープンな議論をするセッションに集った。会議の議論を通じて全会一致を目指すのを SSRC が放棄したことを継承した。しかしながらそれは新しい学問エリートの境界を画定する試みであり、第二次世界大戦後もこの役割を果たし続けた。

²⁴ しかしこれらの格付けは他のトップ学科の院生を位置づける学科の力のインデックスとしてはあまり意味を持たない。例えば、シカゴ大学の法外な数の任用はシカゴ大学の Ph.D であり、一般的にトップ学科はお互いから採用することは断固ないのである。ハーヴァードのような新興学科は「トップ」学科出身の院生を採用しないで自らを上昇させようと努めた。1930 年代までで、主要 5 学科の各々

だが学部レベルと大学院レベル双方での教える営みに関しては、社会学はその資源基盤を保持し拡大した。学部レベル大学への社会学の拡張とこれらの大学での Ph.D 保持教員への需要は 1930 年代の成長部門であった。この拡張は図 2.2 に示されるように、新しい Ph.D 保持者の数の増加を可能にした。この増加は予想外であった。1934 年にファリスとチェイピンは Ph.D の過剰供給が避けられないと想定されることで手紙を交わしている。ファリスは過剰供給は政府雇用によって吸収されねばならないだろうと語っている (Chapin 1934; Faris 1934a)²⁵。

ハーヴァードとデュークのような新興学科が社会学者のための適切な訓練に関して強いコンセンサスに加わらなかった状況での増加の帰結は、社会学の一層の断片化を引き起こした。これらの新興学科は新しいやり方で学生を訓練しシカゴ、コロンビアに君臨する概念と別な概念を持った。

1930 年代の断片化のもう一つの兆候は、教科書の中身と教科書の指導的執筆者の経歴にみられる「短大、単科大学」と「総合大学」の違いをめぐって展開した。当時の教科書と広く大衆向けの執筆は大いに共通していた。この事実は名目的なところが多い小規模な短大に社会学が広がることにおそらく問題であろう。社会再建に関するその著作が文字を知っている教会に行く人、司祭向けのエルウッドのような著者は角の取れたキリスト教教育の一翼として社会学を正当化し、バーンズのような著者は、社会学に馴染むことは女子短大が養成しようとしている公民権、社会的良心の必須要素であると思っていた。これらの短大の教師達は SRA のメンバーの価値、利害関心を共有しなかった。今日と非常に似て、彼らは後者の著作や彼らの科学的権威に依存しなかった。むしろ彼らは教科書文献とその学生を惹きつける能力に依存した。例えば、バーンズの非常によく売れた社会問題テキスト (1942) のような作品は今日のテキストよりも文化リテラシーの多くを要求し、学生が当時それから自らを解放していた偏見に直接ねらいを定めたメッセージを含んでいた。知的な開放は、その下で社会問題が処理される配列が利害対立と非合理的な教義を反映している公準を証明する形を取った。当時の教科書の多くは重要な社会学者による傑出した作品であり、彼らは自分の聴

に院生を送り込んだ唯一の学科はギデングス時代のコロンビアであった。ロバート・マキーバーとロバート・リンドはギデングスの偉業を受け継ぐことはできなかった。かくして弟子の連続的交換は確立せず、「エリート」学科は非エリート学科と非常に異なったプレズメント記録を持つことはなかった。

²⁵ この言明はコロンビアとシカゴの Ph.D 過剰生産を批判したチェイピンに応えたもので、ファリスの言明は絵空事であった。社会学者を雇うべきファリスが信じた市の機関には当時有意の需要は一切存在しなかったから。ファリスは正反対の雇用図に直面して Ph.D 過剰生産を減じることを拒否する Ph.D 計画の最後のリーダーではなかった。実はシカゴ大学の構造は学科を院生の入学者とグラントに依存していたので、ファリスには何ら選択権がなかった。院生自身は時折連邦政府のポジションを獲得することがあったが、統計学者か人口学者としてであった。過剰なもの大半は、短大における Ph.D 保持者への需要の予想外の拡張と学部レベルの講師の引き続きの拡張に吸収された。

衆の信念に直接語りかけ、彼らを変えようと試みるものであった。この点でこれらの著作は、当時より「上級の」大学院プログラムから絶滅しかかっていた啓発というワードのねらいを運んでいた。しかし彼らのメッセージは学部レベルの講義として社会学を有効にした。結果として、社会学のあらゆる下位領域のためのテキストはアメリカ社会学の他のいかなる側面の増加率をもはるかに上回っていた²⁶。

財団から研究資金を給付されていたエリート社会学者が社会学の様々を横断して通用した、はっきりとした認知的成功をおさめていたら、1930年代の断片化は起こらなかったかもしれない。少なくとも、社会学は学問的にあまり成功していない部分への依存を減らす方法で再建されていたかも知れない。しかしそのような成功は実際は存在しなかった。SRAの創設はその分野の有力な人物の間に共通的方法的基盤を維持しようとする努力と、同時に十分に連結され才能豊かな若手社会学者を推挙する努力を代表する。しかしこの共通の土壌は大もとの社会学(sociology at large)と共有されなかった。これが今日まで持続する亀裂を作り出した。

ASSとそのライバルと新雑誌は組織資源である。それらは社会学者が彼らの声を興味ある聴衆に聞かせ、彼らの仕事を彼らのアカデミックな雇い主に正当化する手段であった。この新しい組織の各々は異なった構成員を代表した。しかし1930年代末までに明らかになった組織資源の分布と資源基盤の多様性は、社会学と同じ比率で拡張できないASSの非力と相まって、大いに重要なことを示していた。アメリカの場で実践できた様々の種類の社会学は自分を維持する手段を容易に見つけ出すことができ、他のものを無視することができた。例えば、農村社会学はじきにPh.Dを生み出す大学の学科を持って実質的に社会学から離れた。しかし教養系短大と大学院課程を持つ研究大学の関係に明らかなように、区分の他の点は複雑である。後者はPh.D学生を生み出すために前者に依存した。逆に短大は自分のところの教師の養成を後者に依存した。しかしこの結びつきは大して拘束的でもなければ、それぞれの内部要求ほどには強くなかった。

3. シンボリックな統一の努力：戦間期の方法

その1：1930年代の方法論争

SSRCに関わった人々のネットワークは財団援助への特権的アクセスと社会学の大衆に対

²⁶ オーダムの『アメリカ社会学』(1951)は上記の分野の各々に一連のテキストを載せている。社会問題文献への彼自身のテキストの貢献には、『社会的ガイダンスを欲する人間(1927)』『アメリカの社会問題(1939)』が載っている。1920年代以前に訓練を受けた世代の社会学者はこのジャンルに献身的である。例えばギデンズの弟子のほとんどは教科書を書き、時には何冊も書いた。

する優越感をもった。1930年代末までに優越感の源泉が大して意味を持たなくなった。それは社会学に与えられる財団のファンドがほとんどなくなったからである。しかしこの集団は「エスタブリッシュメント」であり、エスタブリッシュメントの批判と内部論争はこの時期の最も興味を惹く著述の一部にとって源泉であった。1930年代の方法論争はチャールズ・エルウッドの『社会学の方法(1933)』(SSRC エスタブリッシュメントの方法観に対する攻撃)で始まり、リンダの『何のための知識か(1939)』(講義と財団資金による社会調査のコンセプトに影響力を及ぼそうとする内部者の試み)で終わった。双方の試みは失敗に終わった。もっと一般的に言うと、社会科学を「科学的」にしようとするSSRCの試みの長い政治史は、社会学者が科学の性質に関してコンセンサスを得た見解を採用するよう説得された程度を見ただけでも、失敗の歴史であった²⁷。例えば1920年代に一種の攻撃的な経験主義が登場した。それは、その目的として「理論」「哲学的方法」の正当性を奪うこと、社会学と大学院教育からそれらを排除することを積極的に求めた²⁸。しかしながら議論すべき首尾一

²⁷ 方法論上のコンセンサスを生み出そうと最大限の努力を払った学問は最大の失敗を被った。メリアムは1923年から1925年までに政治の科学に関する3つの全国会議をオーガナイズした。その運動は10年間の末に組み立てられたが「ほとんど一夜にして」撤退した。1930年代初めまでは一ファクターではなかった(Somit/Tanenhaus 1982: 87)。しかしながらフィールドの状況は重要な点で異なっていた。立法府(議会)の批判的分析の伝統的な任務と立法府の歴史、政治哲学の歴史、他のそのような活動は容易に政治についての統計的な「科学」には吸収され得なかったし、活動として合法性を奪うことはできなかった。これらの活動を排除する仕方での学問が境界線を引く展望は皆無であった。メリアムは政治に対する歴史比較法、馬鹿丁寧に法を遵守する方法について語りながら、「我々は我々の年長の友人に行くことを求めている」と私は提案しているのではないと述べている(quoted in Somit/Tanenhaus 1982: 110-111)。

しかしながら、社会学ではそのねらいは「科学」に好意を持ち「哲学」を排除することにあった。しかし社会学者は「科学」という概念に関わる際に政治学者と同じ厄介を抱えることになった。SSRCは社会科学のためのコンセンサスを持った方法論の立場を構築するひとつの大きな試みのスポンサーとなった。Stuart Riceによって編集された一巻(1931)は社会学のすべてから集めた社会調査事例の断片についての批判的研究と経験的社会科学の問題領域の批判的研究を含んでいた。結果を統合する手荒い試みは一切存在しなかった。重要な最近の著作のリストの選択のような仕事さえ深刻な対立を引き起こすほど多様性が存在することが当初から明白になった。SSRCのメンバー団が、「10の傑出した貢献」のリストを提示するように求められた。ASSだけがプランが変更される前に編集した。そのリストは『プロテスタントの倫理』から統計学者で経済学者 Mordecai Ezekiel の曲線型多重相関法に関する博士論文までヒテロジェニアスなもので、選択による強い一貫したメッセージは何も伝わらなかった。きっとSSRCも伝えようとしたメッセージが何もなかったであろう。ライスもこのリストが掲載されているアペンデックスで「重要性の基準が予め同意されていないければ、傑出した寄稿の選択を行うことが困難である証拠を私は提示した」と注釈している。彼は続けて「これらの基準は見解によって左右され、恣意的なものになるだろう」と述べている(Rice 1931: 749)。

²⁸ フロイド・ハウスは社会学の論理、社会学史、社会学理論における基本的争点の議論に対する二種の反応を対比した。一方の端には、「社会学理論と論理と歴史の問題が限定された調査問題に比べて取るにとらなるとか、社会学の上級学位の候補者にとって研究の健全プログラムにおいてこのトピックに全然時間が振り向けられるべきでないという、彼の意見を少しも隠そうとしないかなり威信と影響力のある社会学者がいる(House 1936: 301)」。これらの態度の背後にある反知性主義の兆候は非常に目立っている。エルウッドは「考えるな、観察せよ」というスローガンを用いている(Ellwood 1933: 26)。もっと穏健な意見は、ASSの集会、「社会学を教える」部会で、Malcom Willeyによって述べられたのだが、「プロの社会学者になることを望む学生は大学院の研究を具体的調査から始め、自分が関心を寄せるリサーチ問題を照射するのに必要と感じる文献の自主的探索によって、社会学理論の把握を獲得すべきである(characterized by House 1936: 301)。「具体的調査」というタームはSSRCを連想させるa code wordであった。エルウッドは、SSRCのモットーは「具体的調査の数百万ドルで、哲学のための一セントではなかった」という趣旨の当時の常套句を引いている(Ellwood

貫した方法論教義がない中で、議論はスローガン作りと相手攻撃に堕した。

その話題が尋常でない熱を帯びたのは、SSRCの資金給付決定と選択偏向に多くの社会学者が強い否定的反応をしたためであった。オグバーンの『最近の社会趨勢』に対するソローキンの批判は激しいものであった（Bannister 1987: 185-187）。それはSSRCの成果ではなかったものの、オグバーンの作品はSSRCの7つの要素を最もよく表現し、SSRCのロックフェラーサポーターのねらいに最も近かったため、批判者はその欠点をチャールズ・ピアードの言う「アメリカ社会科学が長く拘束されてきた経験的方法の迫りくる危機」（quoted in Bannister 1987: 186）の現れとして取り上げた。

SSRC コンセプションとして彼が見なしたものに対する最も包括的な攻撃であるエルウッドの批判（1933）は、新しいエリートの公準、論争し合う当事者の違いの案内として示唆的である。オグバーンはエルウッド批判にとって範例の人物で、彼の批判の対象はオグバーンとライスであった。エルウッドが言うには、主要な対立はマッハとピアソンの科学哲学に基づいて社会学のねらいと方法の狭い見地を擁護する者と、方法論的多元主義者で社会学における総合理性と批評の役割を認める自分のような者のあいだのそれである。社会学の境界をめぐる他の多くの論争はこの大きな対立と連動しているように思われる。例えば、社会学にとってふさわしい聴衆、そのふさわしい使命、評価言説の役割と認識論的性格、評価的言説と科学的言説の境界、仮説の性質と概念思考との関係、「技法」のマスターに比しての従来の学問「学習」の相対的重視、優先されるべきデータの相対的重視、相関と対照的な正しい因果的説明の地位、最も重要な、主観的、文化的領域の測定に還元可能という問いをめぐる論争²⁹。上記の論争のすべては理論と方法とこの分野の批判の役割に遡ると彼は語っている。

社会学は「相互に互いを攻撃し非難しようとする敵対的学派に分裂している（Ellwood 1933: 3）」というエルウッドの状況特徴づけは彼の著書の反応によって十分認定されてい

1933: 26)。

²⁹ 争点は徹底的にもつれている。エルウッド自身の立場は社会学と価値、公共目的との関係についてのアイデアの布陣の一端である。それは彼の師、デューイ、ミードとウォードの啓発的 sociology の理想に大いに負っている。エルウッドは「社会学者は市民の義務を負った市民であるだけでなく、学者が人間の事柄の研究で離れたインパーソナルな見地を維持しなければならない一方で、彼は実際の具体的人間世界との接触を失うべきでない。もしこれが実際の参加を通じてなされるなら申し分ない」と述べている（Ellwood 1933: 9-10）。彼は、行動主義へのひとつの異議は「それがその結果を発話した者以外にはわからない言語で述べる点であると論じることによって、これを社会学の著述にまで広げている。社会科学がその結論が一般人の塊によって理解され、受け入れられ、則って行動されるまで決して多くの効用を持ち得ない」というエルウッドの見解によってその批判は裏打ちされる（Ellwood 1933: 53）。これは社会学の目的についての奇想天外な把握ではなかった。ベルシー・ブリッジマンは1950年のスタウファアとの論争で啓発的学問という同じ社会学観を抱いていたが（SAS）、彼は正反対の結論に至っている。「人は十分に合理的でないので社会学によって助けられねばならない（Bridgeman）」ある意味でこれはエルウッドが「キリスト教は世界中の道徳的、知的指針の求めに提供しなければならないと決断したときのエルウッド自身の後期の結論である。

る。それは多くの好意的レビューを持ったが、その議論の真摯さと正当性は翌年で証明されたが、ニューエリートの年長者、ファリスによって嘲笑された。彼は AJS の書評で、ASS のエリートに浴びせられた尊大な非難にタイムリーな肯定を与えた。ファリスのリプライは、「自然科学的方法が社会科学に向いている」という主張の純粹にスローガンの弁護であった。

著者は社会科学を自然科学と対比したがっている。しかしこれはちょっと物議を醸す。なぜなら社会生活はまた自然なものでもあるから。…すべては自然的である。殺人、自殺、盗み、離婚、人種偏見いずれも自然なものである。カポネはリンドバーグと同じく自然の産物である (Faris 1934: 688)。

この種の応答に直面して、争点の真面目な議論は進むことができなくなった。方法論の論争自体も不信を買った。スタウファーとラザースフェルドの世代にとっては、それはタブーであったが、エルウッドとの論争の諸要素はインサイダーの中では続いた。

1930 年代半ばから SSRC サークル内でさらに二つの論争がみられた。

- (1) 「科学的」社会科学者と改革者の残党 (Shelby Harrison や Robert Lynd) の間の論争。
- (2) 主観的なものの計量をめぐる Herbert Blumer と Samuel Stouffer の間の論争。

ブルーマーの見解は SSRC の方法に関する特別会議で提出されたトマスとズナニエツキの『ポーランド農民』批判 (1939) に見いだされる。この批判はオリジナリティに欠けていた。部分的には、それは 10 年前にブルーマーの師匠であったエルウッドによって提出された人間行為の性質に関する議論の要点を反復したものであった。リンドの議論は社会科学のための支援の大幅な拡張前夜に財団志向のニューヨーク改革派のメンタリティの現れとして興味深いものである。

リンドの分析は SSRC の経験を反映し、ロックフェラー主導の本来の反学問的公準に密着し、社会学はその総合的みせかけを放棄し問題志向的となるべきことを提案している。しかし彼は計量化への動きは「本質的には健全」だが方法の洗練が伝統的な学問問題に適用されてきているが故に、有害な影響を及ぼしてきていると指摘する (Lynd 1939: 17)。またそれは学問の専門化の中でキャリア昇進の目的に奉仕したと指摘する (Lynd 1939: 18)。彼の述べるところでは、必要なのは文化問題 (より正確には人間のニーズにより応える目的で文化の改革を要求する問題) と見なされた人類の問題への更新された挑戦である。彼の信じるどころでは、この著作の焦点は「文化とパーソナリティ」研究にあるべきである (Lynd 1939: 52)。彼がその念頭に置いたのは、彼の旧 ISRR の仲間 Lawrence Frank の著作であっ

た (Lynd 1939: 71)。学問としての社会科学の問題点は、根本から疑問を投じる問いを一切尋ねない生ぬるさを超えること、フォークウェイズのコアを超えることに失敗している点である (Lynd 1939: 144)。社会科学の目的はフォークウェイズを改良することであるべきだ。というのは、リンドが我々に語るところでは、「我々の今日の文化はかなりの数の人々の人間パーソナリティの基本的切望の充足という希求を歪めていることが見いだされるときにはいつでも、社会科学の責任があるからである (Lynd 1939: 205)」。この責任をアクションで果たすには、「今はカジュアルな個人のイニシャティブに委ねられている多くの領域へのプランニングとコントロールの広範囲の拡大が不可避免的に必要となる (Lynd 1939: 209)」。民主的アクションのための教育という時代遅れの信条を持つ人物 (エルウッド) と反対に、我々は次のことを受け入れねばならない。

もっと首尾一貫し、建設的な人々の行動を確保するチャンスは彼らにとって自然な大幅な非合理性を承認することと、聡明なタイプの行動を積極的に支持し鼓舞する文化の建設、感情の自発的表明の機会を設けることにかかっている (Lynd 1939: 234)。

何らかの形のこのアイデアは戦後期の「社会心理学」への財団の投資、『アメリカのジレンマ』プロジェクトへのカーネギーコーポレーションの資金援助³⁰の背後にあったと述べることで十分であろう。

その2：態度測定と新しいサーベイ方法の繁栄

エルウッドの著作 (1933) が刊行されるまでに、社会心理学の文献が発達してきたので、主観的領域には計量的方法は向かないというエルウッドの指摘は次第にあたらなくなってきた。態度測定の実践が急速に進み、文献が爆発的に増えた。事実社会学の中の社会心理学の部分は態度問題の強みから中央舞台を占めつつあった。主要な発展は、広告リサーチから借用されたサーベイ技法の使用とサムエル・スタウファーとポール・ラザースフェルドの登場であった。スタウファーはSSRCの究極的インサイダーであった。多数の人口学者に混じって、彼とフレデリック・ステファンは計量化のシカゴ大学の展開を引き継いだ。シカゴ大学は今ではサンプリングと測定という新たな変貌した方向に切り替えた。その変貌はある意味で研究資金給付の事柄であった。ラザースフェルドのラジオリサーチのような若干のプロジェクトは、引き続きその財団によって資金給付された。この仕事の技法と知的インスピレー

³⁰ これらは次章で取り上げる。

ションは、社会学の外部源泉、特に大規模な質問紙サーベイを実施するためはるかに精巧な研究資金を持つ世論調査員、商業市場調査員から得ていた。1930年代末にようやく利用できるようになった技法であるサンプリングはアカデミック研究者の手の届くところにこの種のサーベイワークをおいた。

スタウファーとラザースフェルドによってなされた仕事はそれ自身の資源基盤の上に立っていた。それゆえその仕事に研究資金を得させるためにその仕事を社会学として正当化することは不要であった。従って彼らは当時の方法論争を避ける自由を持った。スタウファーの1930年代の著述は慎重に避けていた。実際彼は事例研究、歴史法のような代替「方法」を拒絶しなかった。それらは「偶然のエラー範囲が知られている数理的回帰のビジョン」を超えた目的に奉仕すると彼は述べている。そのうえ彼のいうには、「ある人の調査の目標として」このビジョンは「ある人の問題を考え抜くのを助けるかも知れないが、しばしば次の理由でその文字通りの目的にたどり着くのに大して有用な概念ではない」。

十分な数の我々の問題の基底にある可能な母集団の常数はおそらく時間的にあまりに早くシフトするか、あまりに場所毎に異なるので、物理学や生物学においてなされうる入り組んだ種類の研究に費やすお金を承認できない。また往々にして、重要な要因の数値インデックスは未知の信憑性を持つか存在しない (Stouffer 1934 : 485)。

この種の議論は彼らの先行者の方法の究極的目標と上記の目標についての関心が引き起こした論争を無視している。

例えば、少年非行の場合、どんなに入り組んでいても数学の方程式で把握することは難しい。それは、その解釈が本質的に芸術的手続きであるドキュメントを含む非計量的性質の少年非行データが伴わない多くの価値を持つだろう。そして我々の方法が自然科学のもっと正確な領域で使用されているもののコピーでないかどうかとなぜ配慮すべきなのか。『ジャックローラー』は科学より芸術に近いだろう。「科学」という語は従来科学者によって使われ、その研究が数年間でも我々が非行を理解するのを助けるなら、それは良き社会学である。社会現象研究に適用された科学という語を使用する猶予を人はどうして敢えて宣言しなければならないのか。測定に我々を「制限する」ことはリサーチを不毛なものにすることだろう (Stouffer 1934 : 485)。

上記の引用文は一連のメッセージを伝えている。社会学の「科学的」性格の議論に参加する

ことの拒否。そのようなコンセプトに依拠しない「良き社会学」という予め与えられた基準の受容。このプラグマテックなアプローチはスタウファーが優れた関係を開発した財団のリーダーにとっては魅力的であった。それは大学院生にとっても魅力的であった。しかしそれは、理論の伝統の中で提起された大きな心穏やかでない問いから「経験社会学」を断絶させる働きをした。

4. シンボリックな統一の失敗：戦間期の理論

1920年代後半から1930年代においては、「理論」は第一次世界大戦以前に意味したもの、つまり社会思想史と進歩的変動概念を意味した。フロイド・ハウス（1936）、チャールズ・エルウッド（1938）、ハリー・エルマー・バーンズ／ハワード・ベッカー（1938）は重要な歴史的サーベイを著した。ピティリム・ソローキンは4巻に及ぶ『社会と文化のダイナミックス（1937）』を著した。チェイピンは文化変動に関して著した。1930年代の最も野心的な「理論的」教科書はE.E. ユーバンクの『社会学の諸概念：その主要概念から述べられた社会学理論編成を提示する一試論（1932）』であった。これはタルコット・パーソンズの『社会的行為の構造（1937）』に受け入れられる雰囲気格好の示唆を与えたと同時に、『社会的行為の構造（1937）』ならびに『社会体系（1951）』『行為の一般理論を目指して（1951）』のようなパーソンズの後期の作品の影響が判定されるベースラインを与える。

ユーバンクはスモールの弟子で、彼の著書をスモールの死の少し前の1926年の日付のスモールからの鼓舞する手紙の引用で始めている。スモールはユーバンクの「たゆまぬ努力」があったことを認めている。スモール自身その一翼を担った社会学の反乱とは

本質的には人間の運命はマスへの集計以外のつながりを持たない分子の氷状の引力であるという社会科学を支配する思想への反抗である。社会学者は何らかの仕方では人間の運命は互いに密接に関係しているという洞察に彼らの信念を捧げた。これは「社会有機体」と動物有機体のアナロジーを辿ることによって生命の神秘を探ろうとする彼らの試みのシークレットであった。これは誤った手がかりであることが判明したが、我々が解釈しようとしている心理的鎖に導いた。ここしばらくは社会学者は、彼らが人間社会全体を見失う危険にある個別タイプの人間の集合に非常に短時間しか特化していない（Eubank 1931: ix）。

ユーバンクの問題はスペンサー流社会学と有機的アナロジーによって約束された統一の代替

物を探る希望の下に、社会学の主要概念を一種の体系化することにあつた。しかしこのタスクは今やきわめて驚くほどの概念の多様化に直面しながら遂行されねばならなかつた。概念の各々は1920年代末までの教科書文献のなかやリサーチとの関わりの中で自らを設置した。

ユーバンクの諸概念の分析リストはあまりに長すぎるのでここでは再掲できない。それが名称がやや異なり、強調点がやや異なるがパーソンズのスキームに含まれる同じ要素の多くを含んでいると述べることで十分である。そのうえ、それはまた進化主義に由来する多くのアイデアを含んでいた。特に集団間の競争関係が強調されたバラエティとフォークウェイズの間在の物質的実在と政治的実在への依存。ユーバンクは「我々の主要なポイントを行為の観点から述べ直すことによって、物質的なものの群れ全体の総合の基礎が同時に現れる」と結論している (Eubank 1932: 386)³¹。今日の社会学の「概念の無秩序」は、パーソンズ時代の先駆けとして読めるので、引用しておく価値がある。

この状態が過去にどんなに自然で解明されうるものであつたかも知れないが、そのあまりに無慈悲な批判者の攻撃に社会学が被りやすい点に触れないまでも、その持続は社会学を教えたり、リサーチするのに深刻なハンディになっている (Eubank 1932: 50)。

ロバート・マキーバー、リード・ペイン、ホーネル・ハート、ジョージ・ランドバーク、ピティリム・ソローキン、フロイド・ハウス、(アメリカの読者に体系的「理論家」として知られるヨーロッパ人の一人である)レオポルド・フォン・ヴィーゼのような多様な同僚からの引用文によってユーバンクが明らかにしているように、上記の意見は広く共有されている。特に心理学と経済学が整然とした概念ハウスを持っていて、社会学が比較では悩んでいるという強い感覚がある (Eubank 1932: 48)。ユーバンクの作品がこの時代に広く引用されるテキストの一冊になっていることから、これは広く共有されている。

パーソンズの直接の源泉はユーバンクとは異なっている。パーソンズは活動的の科学者L.J. ヘンダーソンとW.D. キャノンの影響を受けて、1930年代ハーヴァードで局所的に流行した有機体アナロジーの変種の上に組み立てられている。ある意味で、パーソンズは「社会過程」、「社会的コントロール」、「集団対立」等のような、代理として提案されてきた複雑な概念のすべてを放棄する一方で、初期の社会学者が不十分と気づいていた目的論的説明様式

³¹ ユーバンクの用いる戦略はアクトに始まり、願望の充足の際の集団生活の役割を経て、意欲の形成、行為の統制、「彼の生活がその中にセットされ、それによって条件付けられる文化を提供する」際の集団生活の役割に進む概念枠組みの総合を構築するものである (Eubank 1932: 389)。

と有機体に回帰している。これらは概念の節約と理論的首尾一貫性の故に捨てられている³²。

この一貫性が達成される仕方はハーヴァードでのパーソンズの状況、独自の自律的理論問題を持つ科学として社会学を確立したいという彼の個人的ニーズと大いに関連がある。『社会的行為の構造 (1937)』で彼が同定した問題——「ホップズ的」秩序問題——はアメリカ社会学においてもオリジナルなものではなかった。ギデンクスもまた「社会学において最も重要な問いは社会の事実を説明することであった」と考えていたが、パーソンズは1930年代のハーヴァード院生に「これは理論的解答が存在する問題である」、「その解決への邁進は満足いく知的生活となれる」ことを伝えようとしていた。

大きなシステム内での概念の洗練の過剰な任務を背負うパーソンズのプロジェクトは、重要な形態のアカデミックな営為であった。それはシカゴ学派社会学、改革派センチメンタリズムからの従来の転向者によって満たされるニーズと全く異なった学生のニーズを満たすものであった³³。パーソンズは社会学の学生を理論家にかなりの数転向させた、スモール以来の院生の最初の教師であった。実際ハーヴァード大学の学科は、学科が理論に重点を置いていること³⁴とこの当時その理論家の目立つことを自慢していた。このトピックを小さな短大で広く学習されている、あるいは州立大学の多数の学生を惹きつける純粋学問にすることは現実的な希望ではない。パーソンズ自身はそのような幻想は一切抱いていなかったし、彼自身の作品はプロフェッションとしての社会学という彼の構想と調停する仕方で展開している。

文献一覧

Adler, Mortimer J. 1977 *Philosophy at Large: An Intellectual Autobiography*. New York: Mac-

³² もし初期パーソンズ社会学のトピックの範囲と1930年代の典型的入門教科書——ジェローム・デーヴィス／ハリー・エルマー・バーンズの共著(1931)——で取り上げられているトピックの範囲を比較するならば、社会学の問題に秩序をもたらす際のパーソンズの主要な武器は伝統的なトピックのほとんどをはずすことであった。このテキストに含まれているトピックは、気候、公衆衛生、遺伝と人種、地理的影響、先史時代の人間の発達、社会心理、リーダーシップと宣伝、文化パタン、社会遺産、文化エリア、社会組織、コミュニティ、国家、資本主義秩序、貧困、犯罪、ホーム、余暇等である。

³³ リンドは1930年代後半の社会学の大学院プログラムの院生について書きながら次の観察をしている。

歴史学大学院は社会学の大学院同様、同じ理由で、関心が確定していないとか多岐にわたる不当に多数の学生を惹きつけている。人は歴史学や社会学の中に「はいる」ために他の問題と関連した、選りすぐられた問題にはっきりした関心を必要としない。これらの分野は非常に広いので、迷いながら何らかの神秘的仕方で「自分を見つける」ことを希望している学生にとって特に歓迎的であるように思われる。この点で歴史学と社会学は環境の不運な被害者ではない。不定型な学生を惹きつけるのは両学問の不定型な性格である（〔1939〕1967: 174）。

³⁴ ソローキンはハーヴァードの学部生に魅力的に見せることができた。

- millan.
- Barnes, Harry Elmer/Howard Becker** 1938 *Social Thought from Lore to Science*. Boston : D. C. Health.
- Bannister, Robert C.** 1987 *Sociology and Scientism : The American Quest for Objectivity, 1880-1940*. Chapel Hill : University of North Carolina Press.
- Bernard, Jessie** 1929 “The History and Prospects of Sociology in the United States.” in : Geroge A. Lundburg/Read Bain/Nels Anderson (eds.) *Trends in American Sociology*. pp. 1-71. New York : Harper & Brothers.
- Bernard, L.L.** 1924 *Instinct : A Study in Social Psychology*. New York : Holt.
- Blumer, Herbert** 1939 “Critiques of Research in the Social Sciences I : An Appraisal of Thomas and Znaniecki’s *The Polish Peasant in Europe and America*.” New York : Social Science Research Council.
- Brunner, Edward de S./Gwendolyn S. Hughes/Majorie Patton** 1927 *American Agricultural Villages*. New York : George H. Doran.
- Bureau of Statitics of Labor (Massachusetts)** 1870 *Report (I)*.
——— 1874 *Fifth Annual Report*.
- Chapin, F. Stuart** 1920 *Fieldwork and Social Research*. New York : Century.
——— 1934 “The Present State of the Profession.” *American Journal of Sociology* 39 : 506-508.
- Comte, August** 1830-1842. *The Course of Positive Philosophy*. London : Bell & Sons.
- Cooley, Carles Horton** 1902 *Human Nature and the Social Order*. New York : Scribner.
——— 1909 *Social Organization*. New York : Scribner.
——— 1918 *Social Process*. New York : Scribner.
- Cressey Paul G.** 1932 *The Taxi-Dance Hall : A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Davis Jerome/Harry Elmer Barnes** 1931 *An Introduction to Sociology*. rev.ed. Boston : D. C. Health.
- Devine, Edward T.** 1939 *When Social Work Was Young*. New York : Macmillan.
- Eaton, Allen/Shelby M. Harrison** 1930 *A Bibliography of Social Surveys*. New York : Russell Sage Foundation.
- Editor.** 1880 “Editorial Page.” *The Popular Science Monthly* 15 (June) : 2.
- Ellwood, Carles A.** 1933 *Method in Sociology : A Critical Study*. Durham, NJ : Prentice-Hall.
——— 1938 *A History of Social Philosophy*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- Eubank, E.E.** 1932 *The Concepts of Sociology : A Treatise Presenting a Suggested Organization of Sociological Theory in Terms of its Major Concepts*. Boston : D.C. Health.
- Faris, Ellsworth** 1934a “Too Many Ph.D.s ?” *American Journal of Sociology* 39 : 509-512.
——— 1934b “Review of Methods of Sociology.” *American Journal of Sociology* 39 : 686-689.
- Fisher, Galen M.** 1934 *The Institute for Social and Religious Research, 1921-1934*. New York.
- Fry, C. Luther** 1924 *Diagnosing the Rural Church : A Study in Method*. New York : Geroge H. Doran.
- Fox, Richard W.** 1983 “Epitaph for Middletown : Robert S. Lynd and the Analysis of Consumer Culture.” in : Richard W. Fox/J.J. Jackson. (eds.) *The Culture of Consumption : Critical Essay in American History, 1880-1980*. pp. 103-141. New York : Phanttheon Books.
- Galpin, Charles Josiah** 1938 *My Drift into Rural Sociology*. Baton Rouge : Louisiana State Univ. Press.
- Giddings, Franklin** 1896 *The Principles of Sociology*. New York : Macmillan.
——— 1901 *Inductive Sociology : A Syllabus of Methods, Anayses and Classifications, and Provisioally Formulated Laws*. New York : Macmillan.
——— 1906 *Readings in Descriptive and Historical Sociology*. New York : Macmillan.

- 1922 *Studies in the Theory of Human Society*. New York : MacMillan.
- 1924 *The Scientific Study of Human Society*. New York : Arno Press.
- Gillin, John L.** 1927 “The Development of Sociology in the United States.” *Publication of the American Sociological Society* 21 : 1-25.
- Hinkle, Roscoe** 1980 *Founding Theory of American Sociology, 1881-1915*. Boston : Routredge & Kegan Paul.
- House Floyd N.** 1936 *The Development of Sociology*. Westport, CT : Greenwood Press.
- Israel, Belle L.** 1912 “Regulation of Public Amusements.” *Proceedings of the Academy of Political Science* 2 (July) : 123-126.
- Johnson, Guy B./Guion G. Johnson** 1980 *Research in Service to Society : The First Fifty Years of the Institute for Research in Social Science at the Univ. of North Carolina*. Chapel Hill : Univ. of North Carolina Press.
- Kaesler, Dirk** 1985 *Soziologische Abenteur : Earle Edward Eubank Besucht Europaische Soziologen in Sommer 1934*. Opladen : Westdeutscher Verlag.
- Lindeman, Edward. C.** 1924 *Social Discovery : An Approach to the Study of Functional Groups*. New York : Republic.
- Lyman, Stanford M.** 1972 *The Black American in Sociological Thought : A Failure of Perspective*. New York : G.P. Putnam’s Sons.
- Lynd, Robert S.** 1939 *Knowledge for What ? The Place of Social Science in American Culture*. Prnceton, NJ : Priceton Univ. Press.
- Lynd, Robert S./Helen M. Lynd** 1929 *Middletown : A Study in American Culture*. New York : Hartcourt, Brace.
- Matthews, Fred H.** 1977 *Quest for an American Sociology : Robert E. Park and the Chicago School*. Montreal : McGill-Queen’s Univ. Press.
- Mayo-Smith, Richmond [1895] 1910** *Science of Statistics. Part 1. Statistics and Sociology*. New York : Macmillan.
- Mead, George Herbert** 1934 *Mind, Self, and Society*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Meroney, W.P.** 1931 “The Membership and Program of Twenty-five Years of the American Sociological Society.” *Publication of the American Sociological Society* 25 : 55-67.
- Morgan, J. Graham** 1982 “Course and Texts in Sociology.” *Journal of the History of Sociology* 5 (1) : 42-65.
- Nelson, Lowry** 1969 *Rural Sociology : Its Origin and Growth in the United States*. Minneapolis : Univ. Minnesota Press.
- Odum, Howard W.** 1927 *Man’s Quest for Social Guidance : The Study of Social Problems*. New York : H. Holt.
- 1951 *American Sociology : The Story of Sociology in the United States throug 1950*. Westpot, CT : Greenwood Press.
- Ogburn, William F.** 1922 *Social Change*. New York : B.W. Huebsch.
- Ogg, Frediric A.** 1928 *Research in the Humanistic and Social Sciences. Report of a Survey Conducted fot the American Council of Learned Societies*. New York : Century.
- Park, Robert E./Ernest W. Burgess** 1924 *Introduction to the Science of Sociology*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Parsons, Talcott** 1937 *The Structure of Social Action*. New York : McGraw-Hill.
- 1951 *The Social System*. New York : The Free Press.
- Parsons, Talcott/Edward Shils** (eds.) 1951 *Toward a General Theory of Action*. New York : Harper & Row.
- Peason, Karl** 1900 *The Grammer of Science*. 2nd ed. London : A&C. Black.
- Porter, Theodore M.** 1986 *The Rise in Statistical Thinking. 1820-1900*. Prnceton, NJ : Prnceton

- Univ. Press.
- President's Committee on Social Trends** 1933 *Recent Social Trends in the United States*. vol. 1. New York : McGraw-Hill.
- Raushenbush, Winifred** 1979 *Robert E. Park : Bibliography of a Sociologist*. Durham, NC : Duke Univ. Press.
- Rhoades, Lawrence J.** 1981 *A History of the American Sociological Association 1905-1980*. Washington, DC : American Sociological Association.
- Rice, Stuart A.** (ed.) 1931 *Methods in Social Science : A Case Book*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Riley, Matilda White** 1960 "Membership of the American Sociological Association, 1950-1959." *American Sociological Review* 25 : 914-926.
- Silbey, Elbridge** 1974 *Social Science Research Council : The First Fifty Years*. New York : Social Science Research Council.
- Simpson, Ida Harper** 1988 *Fifty Years of the Southern Sociological Society : Change and Continuity in a Professional Society*. Athens : Univ. of Georgia Press.
- Small, Albion** 1905 *General Sociology*. New York : Arno.
- Somit, Albert/Joseph Tanenhaus** 1982 *The Development of American Political Science : From Burgess to Behaviorism*. New York : Irvington.
- Sorokin, Pitirim A.** 1937 *Social and Cultural Dynamics*. 4 vol. New York : American Book.
- Spencer, Herbert** 1873 *The Study of Sociology*. New York : D. Appleton.
- Stern, Bernard** 1932 "Giddings, Ward, and Small : An Interchange of Letters." *Social Forces* 10 : 305-318.
- 1933 "The Letters of Albion W. Small to Lester F. Ward." *Social Forces* 12 : 163-173.
- 1937 "The Letters of Albion W. Small to Lester F. Ward : IV." *Social Forces* 15 : 305-321.
- 1948 "The Ward-Ross Correspondence III, 1904-1905." *American Sociological Review* 13 : 82-94.
- 1949 "The Ward-Ross Correspondence IV, 1906-1912." *American Sociological Review* 14 : 88-119.
- Stouffer, Samuel A.** 1934 "Sociology and Sampling" in L.L. Bernard (ed.) *The Fields and Methods of Sociology*. pp. 476-488. New York : Farrar & Rinehart.
- Sumner, William Graham** 1907 *Folkways*. New York : Ginn.
- Sumner, William Graham/Albert Galloway Keller** 1927 *The Science of Society*. 4 vol. New Haven, CT : Yale Univ. Press.
- Taylor, Carl C.** 1919 *The Social Survey : Its History and Methods*. Social Science Series 3. *Univ. of Missouri Bulletin* 20 (October).
- Thomas, W.I./Florian Znaniecki** 1918 *The Polish Peasant in Europe and America*, 5 vol. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Vidich, Arthur/Stanford Lyman** 1985 *American Sociology : Worldly Rejections of Religion and Their Directions*. New Haven, CT : Yale Univ. Press.
- Ward, Lester** 1883 *Dynamic Sociology*. New York : D. Appleton.
- Weed, Frank J.** 1979 "Bureaucratization as Reform : The Case of the Public Welfare Movement, 1900-1929." *The Social Science Journal* 16 (October) : 79-89.
- Wright, Carroll D.** 1909 *Outline of Practical Sociology*. 7th ed. rev. New York : Longman's, Green.
- Yule, G. Udny** 1899 "On the Correlation of Total Pauperism with 'Proportion of Out-Relief.'" *The Economic Journal* 5 : 603-611.

【訳者あとがき】

訳出したのは、1990年発行、Stephen Turner と Jonathan Turner 共著の Sage 出版、*The Impossible Science. An Institutional Analysis of American Sociology* の第1, 2章である。訳出した部分は太字の箇所である。

Preface

Ch.1 The Academicization of Reform : American Sociology Before World War I

Ch.2 The Focused Replaces the Grand : American Sociology During the Interwar Years

Ch.3 The New Optimism : American Sociology After World War II (前号掲載)

Ch.4 The “Golden Era” and Its Aftermath : American Sociology Today (前号掲載)

Ch.5 Possible Sociologies, Recalcitrant Worlds : Conclusion

第3, 4章は前号に訳出掲載済みである。当初はアメリカ社会学の戦後部分のみを訳出する予定だったが、読者の1, 2章への要望が強いことを考慮して今号の掲載となった。断りしなければならないのは、第1章は注は脚注とせず、章末とした。注の長さが異常であることで脚注に置くと、文章の体裁が崩れると判断したためである。第1章にある脚注は、本文から注表記に廻した方が好ましいと訳者が判断し、つけたものである。

本書には1992年アメリカ社会学会大会「著者が批判者と会う」シンポジウムが開催され、その報告と応答が *Social Epistemology* 1994 vol. 8(1) に掲載されている。コメンテーターは、イギリスの社会学者で、戦前のアメリカの社会調査、財団に詳しいサザンプトン大学、マルチン・バルマー、パーソンズの『社会的行為の構造』、パーソンズ初期の論文集編纂者の、ウィスコンシン大学、チャールズ・ケーミック、社会学的機能主義をめぐる論文を集めて編纂した『システム、変動、対立』の編者、マサチューセッツ大学のジェイ・デメラス、ミシガン大学社会調査研究所、ハワード・シューマンの4人で、彼らの批判にジョナサン・ターナーとステフェン・ターナーが応答している。ただしジョナサンの応答は応答とは名ばかりで、自説の補足にとどまり、ステフェンが著者を代表して4人の批判に反論している。本書と批判応答のすべてに目を通した訳者が、第三者としての率直な感想を述べさせてもらおう。

アメリカ社会学会には社会学史部会がなく、社会学説研究は研究としては非常に低く見られ、アメリカの社会学史成果も創生期から現在までの通史は久しく現れていなかった。そのような状況の中で本書の登場は待望久しいものである。批判が集中するのは、「不可能な科学(科学になろうとしてなれていない社会学)」の題の意味するもの、特に「科学」像である。

その説明は本書のどこにも説明されていない。訳者はジョナサンの科学理論的社会学に関する一連の論文を読んでいるので、それはコントの社会物理学にあやかった、自然科学的科学像であることを知っている。同じく批判が集中するのが「制度史的分析」の意味するものである。批判者はまたも説明がどこにもないと騒いでいる。やはりジョナサンを読んでいる訳者には、物質的資源（ファンデングから支給される研究資金、学科スタッフを左右する学生登録の増減）、組織的資源（アメリカ社会学会、大学の社会学科、財団と掛け合う社会学者の団体、大学付属研究センター）、シンボリックな資源（分化する断片化する社会学を統合するシンボル）の観点から分析することを指すことは自明である（コメンテーターたちはこの共著以外に彼らの著書には全く目を通さず、知識も持ち合わせていない）。

ケーミックがいみじくも指摘するように、本書を読んだ者が共通に漏らすのは、論述がいわゆる…で始まり、読者が予備知識を持つことを前提にして進めていることである。例を挙げれば、『アメリカのジレンマ』研究プロジェクトが、どのような経緯でアメリカ人でないミュルダールに決まったのか、カーネギーコーポレーションからどのような資金援助があったかは触れられているが、どのような内容の書物でどのような反響があったかさっぱり触れていない。それは、マートン、ラザースフェルド、スタウファー、パーソンズの扱いについても同様である。草稿は出版物の200頁をはるかに超えるものだったが、200頁に納めるために大幅にカットせざるをえなかったことが災いしているのであろう（ケーミックの言）。古典の中身の紹介が省略されたのは、個人についての学説研究、ある特定の時代の学派についての学説研究でなく、100年にわたる流れを4期に分けて眺める通史であったという事情から、初めから無理な要求だったといえる。しかし、これはコメンテーターの本書に対する印象を非常に悪くしている。

もう一つ、コメンテーターの印象を悪くしているものを挙げれば、社会学会会員数、社会学学士号取得者数、修士号、博士号取得者数の表の出典の記載のないことである。学術書にあるまじき振る舞いと息巻いているコメンテーターまでいる。（2014年の著書では、それらの集計はアメリカ社会学会の提供であることを断っている）。また、戦後から現在までの社会学学生登録者数については、社会学だけでなく経済学、政治学、心理学の同様のデータがあれば、社会学人気の急騰、急落、回復が社会学のみの現象か、社会科学一般に共通の現象なのか識別できるのに惜まれる。それと並んで、大学の学科が受け取る研究資金が連邦政府からのものだけでなく、慈善財団からのものも合わせて載せてあれば、両者の推移がわかるのだがと惜まれる*。コメンテーターが口を揃えて、隣、横（社会学以外）が目隠しさ

* 私的財団から連邦政府に外部研究資金の源泉が移ったことの挙げている唯一のデータは2,100 vs. 3,000 (1956) → 4,100 vs. 42,400 (1980) 単位万ドル (p. 134: ch.4)

れてみえないもどかしさを漏らしているのは同感である。

本書の真価は、戦前のシカゴ学派、戦後のハーヴァード学派、コロンビア学派を中心にアメリカ社会学史を眺める通説に刃向かい、ギデンクス人脈（戦前のコロンビア大学、シカゴ大学＝オグバーン、戦後のウイスコンシン大学）を主流に位置づけた点である。90年の著書ではそれが明示的に語られていないので、1994年の書評シンポジウムの応答のなかで、ステフェンがページを割いて詳しく語っている。

本書は1990年に刊行され、1985年の社会学登録者数が底をついたところまでしか射程に収めていない。その後25年は、瀕死の重傷から立ち直って社会学登録者数は回復を見せている。ただしそれは女性の登録者の増加に負うところが大きい。全体の3分の2は女性である。その所属部会はフェミニズム、ジェンダー研究が大半である。ジョナサンは衰退に向かう時期から今日までの間、全国組織アメリカ社会学会が強力なリーダーシップを発揮しないことを何かと問題にするが、ステフェンは社会学科の威信ヒエラルキー、彼らのASR、AJS編集委員会の牛耳り、ASR、AJS論文掲載のジョブマーケットでの効果など、エリート大学によるジョブ・マーケット・カルテルを問題にする。彼自身がデューイの実験学校出身で、シカゴ大学を入学早々飛び出し、ミズウリ大学で哲学と社会学の修士号と社会学の学位を得たものの、サウス・フロリダ大学の一般教育哲学・社会学担当で、非エリート大学在職者の悲哀をいやというほど味わい、エリート大学への怨念の塊である体験がそうさせている。

バルマーは1992年の書評シンポジウムの司会の席で、大幅にカットしたために言葉足らず誤解を買った点を補正したステフェンの手になる単著が将来出されるだろうと述べているが、その新著（2014）は出るには出たが、本文120頁で、85年から現在までの動向を取り上げた55頁を差し引くと65頁で、200頁が65頁で縮小され、中身も前著の要約ではなく、まったく別な内容である。

本書は上記の瑕疵から、読者が途中で放り出すことが予想されるが、それは産湯とともに赤子も捨ててしまう行為に等しい。著者達の斬新な視点に最後まで読み通してほしい、というのが訳者の希望である。

ターナー／ターナー（戦後部分）についての疑問への回答

Q1. ベビーブーマーの大学進学期の社会学登録者のめざましい増加は何に由来するのか。

A. 社会学の登録者数のグラフしか載せていないので、すなわち経済学、政治学、心理学などの登録者数の動向が不明なので確かなことは言えないが、社会学に限らず一般的に増加したものと思われる。ただその一般的趨勢に加えて、社会学の人气が一頭抜きんでていたものとみている。それは、イデオロギー要素（反政府、反エスタブリッシュメ

ント)と社会問題解決,社会改革期待(ジョンソン「偉大な社会」政策)が関係している。

Q2. 70年代初めから85年にかけての社会学登録者数の急低落(瀕死の重症)は何に由来するのか。

A. ベビーブーム後の18歳人口の低減という一般的趨勢の他に,学生運動後の社会学への幻滅,落胆から,社会学離れが起こった。ベトナム戦争の長期化と反戦運動の激化がそれである。グールドナーによる告発からパーソンズ社会学,行動科学人気(ハーヴァード学派,コロンビア学派)が凋落したためと見るのが通説であるが。

しかし,司法,警察職員に就職を希望する学生のために刑事司法(criminal justice)学士号が新設されたためと,同じく,この時期に登録者数の大幅減少に直面したソーシャルワーク学科が,それまで養成を大学院レベルで行っていたのを,学部段階に下ろしたために,従来の社会学士登録者の大幅な減少を招いたことも見落とせない(前号124頁参照)。

社会学の登録者数が85年にどん底になったのは,社会学科の定員削減,社会学科の廃止も一因である。しかし,これは希望者の激滅の結果を受けての経営側の対応であって,社会学人気低減のそもそもの原因ではない(セントルイスのワシントン大学,ロチェスター大学,社会学科の廃止,社会学科老舗のイエール大学の社会学科の定員40%削減 出典 ニューズウィーク(Feb.3.1992))

ジョナサンは,ASA理事会が強力なリーダーシップを発揮して学会の統率に努力していたら,学会の惨状を防止できたとみている。しかしこれは,社会学の瀕死の原因ではない。ASAは地区社会学会,連字府社会学会の傘組織で,それぞれの学会の利害代表の調整的連合体であって,強力な権限をもつなどというのは望外な期待である。

Q3. 85年以降社会学人気が盛り返したわけは(90年の著書でなく,14年の著書)。

A. 学部,大学院での女性の社会学専攻者が大幅に増えたことが大きい。いまやASAの会員の3分の2が女性会員である。ASAの部会でフェミニズム,ジェンダー論部会は最大で,全会員の3分の1が登録している。

SQ.3.1 ASAにおいて女性会員が多数になったことが社会学にどんな変化をもたらしたか。

A. SWS(Sociologists for Women in Societyの略)の存在を抜きには語れない。この団体は独立の学会でなく,学会内部でのヘゲモニーを握る戦略を採用。ASAの理事,役員に

女性研究者が多数つくようになった。

社会学科教員に一人も女性教員がいないところ、カリキュラムにジェンダー論のない大学を告発したり、比率の高い大学を表彰することにより、ほとんどの社会学科で教員に最低一人でも女性教員をおくようになったし、社会学科のカリキュラムにジェンダー論を必ず設けるようになった。

男性研究者が少数（全体の3分の1）なので、遅かれ早かれ、女性研究者がASAを支配するのは時間の問題である。

Q4. シカゴ大学、コロンビア大学、ハーバード大学社会学科に優秀な研究者が輩出し、一時代隆盛を極めたのはどうしてか。

A. 外部研究資金の調達が大きな役割を果たした。しかし彼らの分析視点は私的財団の事務官とエリート大学の教授とのつながりに限定されるので、外部研究資金の源泉が私的財団から連邦政府に移った、ジョンソンの「偉大な社会」(新ニューデール政策) = スプートニク・ショック以降、社会科学 R&D への企業、政府、軍の需要は巨大で即時的となり、従来のグラント型、大学研究者の片手間研究では対応できなくなり、学術的出版物への変換も難しくなり、フルタイムの研究者で、クライアントの期限付きの要望に対応できる R&D 会社が多数設立されるようになった。博士号取得者がそのような会社に大勢採用されるようになったが、社会学の学位取得者にとっての影響、大学のランキングへの影響など、そのような側面については本書は全く視界を閉ざしている。もっぱら大学のヒエラルキー、大学の雇用市場占有に限定されている。

Q5. 社会学科トップ5とはどこか。

A. トップ5については下記の言及がある。トップ20はどこにも挙げていない。

1920 以前 シカゴ、コロンビア、

1925 シカゴ、コロンビア、ミネソタ ウィスコンシン*

1935 シカゴ、コロンビア、ミネソタ、ノースカロライナ、ウィスコンシン

戦後 ハーヴァード、シカゴ、コロンビア、ウィスコンシン、カリフォルニア州立バー

* ステフェンは、2007年の寄稿論文 (p 126) では、1925年当時の社会学科ランキングを次のように述べている。“A Life in the First Half-Century of Sociology: Charles Ellwood and the Division of Sociology” in Craig Calhoun (ed.) *Sociology in America. A History.*

シカゴ、コロンビア、ウィスコンシン、ミシガン、ハーヴァード、ミズウリ、ペンシルバニア、ノースカロライナ、イエール、イリノイ、オハイオ州立、コーネル、ブライン・モール。つまりミネソタは挙がっていない。(なおランキングは、1925年までは博士学位輩出占有率、1934年は同年発行「名声格付け」に基づく)。(本号99頁参照)

クレー校

Q6. 主導的執筆者のジョナサンがファースト・オーサーでなくステフェンがなっているのはどうして？

A. ポーランド版はジョナサンがファースト・オーサーだったので、米版はステフェンにというジョナサンの配慮から

Q7. 2014年の著書では85年から2013年までの社会学の動静をどのように見ているか。

A. 「活動主義か学会至上主義か共同統治か」という最終章の題が象徴的。

コアになる知性問題として次の5つが挙げられている。

1. 科学理想の追求の終焉
2. フェミニズムと社会学は両立するのか
3. イデオロギーと大もとの社会学（スタインメッツによるホロヴィッツ批判の紹介）
4. 活動主義は統一的なものかオプションなものか
SWSはどちらの側に立つかの問題 学会内ヘゲモニー奪取を目的とするのか全国組織アメリカ社会学会に対抗する組織を目指すのか
5. タブー
イデオロギー（correct politics）に同調しない調査は糾弾される
コールマン・レポート，モイニハン・レポートの事例

この25年の社会学の動向として次のことが挙げられている。

- * 学部生の社会学登録の回復 学部生登録への依存が増大した
パートタイム教員・補助教員，
MOOCs（Massive Open Online Courses の略）
研究担当専門と教育担当専門の分化，教育担当の高校教師風（自ら教材を準備せず，あてがわれた教材を教えるのみ）
- * アメリカ社会学の政治化
学会集会での政治的争点に対する反対決議
- * エリート社会学における実証主義（統計，計量）重視の健在
労働カルテルが弱いジョブ市場と Ph.D 過剰生産の下で強化されている
- * 様々の形態の反実証主義的相対主義が客観主義（科学主義）を浸食
- * 女性化 女性研究，ジェンダー研究の公認

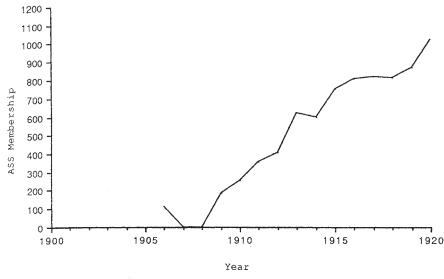


図 1.1 アメリカ社会学会会員数 1920 年まで (p. 29)



図 2.1 アメリカ社会学会会員数 1920 年から 1940 年まで (p. 59)



図 1.2 社会学博士号取得者数 1920 年まで (p. 30)



図 2.2 社会学博士号取得者数 1920 年から 1940 年まで (p. 63)